

大 萩 市

井

堀

勇 著

郷土を愛する心

歴史を愛する心

萩市
大

井

郷土を愛する心

堀勇著

歴史を愛する心

45614

萩市立図書館

ふるさとは

田心ふ心は大井川

瀬々如白浪

立ちきわむ世は

毛利 登人

毛利登人略伝

初め貞武、後武と改む。また五郎右衛門と称し更に登人と改む。号に芹田、主静庵主などあり。

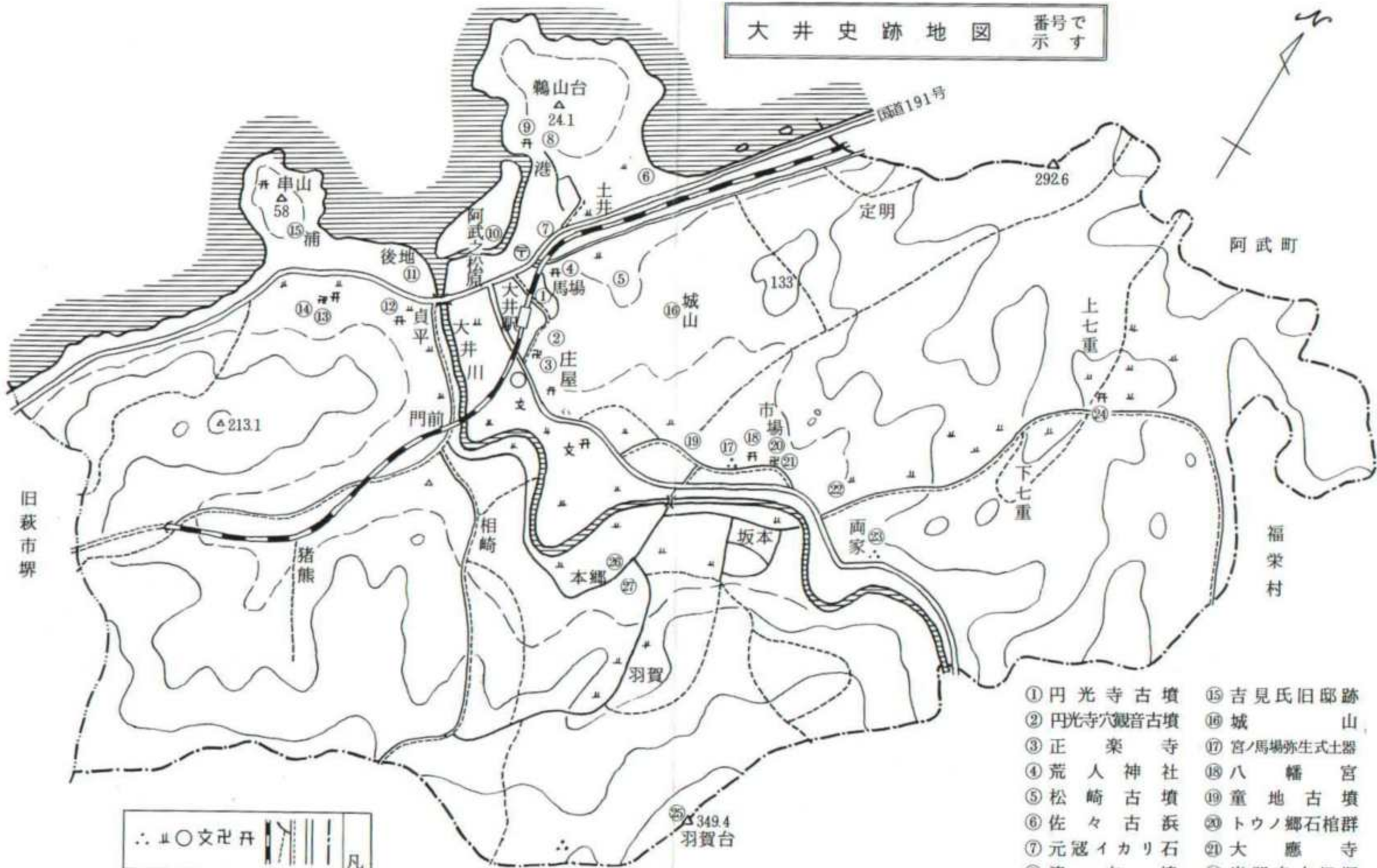
代々宗藩毛利家の重臣にて禄六百五十石を食む。資性孝順、最も武術に長ず。文久二年藩主に従って江戸に上り常時輔佐の任に当たる。その間諸藩の志士と交り尊攘の大義を唱う。元治元年九月京都禁門の変の責に依り俄に野山獄に幽せられ、十二月十九日斬らる。東光寺に葬られてあり。(十一烈士)享年四十四才。

「ふるさとを思ふ心は大井川」と詠じたこの人は、大井川を見て育った人のように感ぜられる。この人を追慕敬仰して、この歌をここに掲げる次第である。

目次

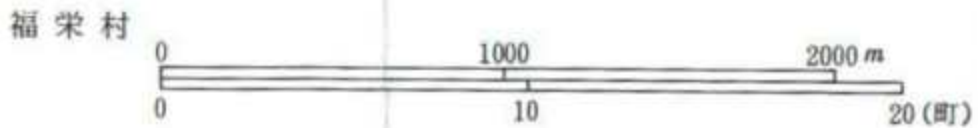
	七重	大寺と領家	大寺	領家	市場、古曾、奈口	庄屋と円光寺	庄屋	円光寺	馬場と土井	馬場	土井	大井湊															
	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----															
	1	5	6	9	13	14	17	18	21	21	21	21															
阿武の松原	-----	大井浦、後地、貞平	-----	後地	-----	貞平	-----	門前、猪熊、相崎	-----	門前	-----	猪熊	-----	相崎	-----	本郷、羽賀、坂本	-----	本郷	-----	羽賀	-----	坂本	-----	大井川と徳山領のこと	-----	わたしの選んだ大井十景	-----
27	31	32	33	40	40	37	43	48	51	55	59	59															

大井史跡地図 番号で示す



- ① 円光寺古墳
- ② 円光寺穴観音古墳
- ③ 正楽寺
- ④ 荒人神社
- ⑤ 松崎古墳
- ⑥ 佐々古浜
- ⑦ 元寇イカリ石
- ⑧ 湊古墳
- ⑨ 恵美須社
- ⑩ 阿武の松原
- ⑪ 三段土俵址
- ⑫ 高倉荒神社
- ⑬ 周鷹寺
- ⑭ 吉見氏の墓
- ⑮ 吉見氏旧邸跡
- ⑯ 城山
- ⑰ 宮ノ馬場弥生式土器
- ⑱ 八幡宮
- ⑲ 童地古墳
- ⑳ トウノ郷石棺群
- ㉑ 大應寺
- ㉒ 光明寺山経塚
- ㉓ 大寺跡
- ㉔ 菅原神社
- ㉕ 羽賀台
- ㉖ 阿牟井駅跡
- ㉗ 弘誓寺跡

△ 山 ○ 文 井 丹	凡 史 耕 支 学 寺 神 鉄 道 県 町 村 例 跡 地 所 校 院 社 道 路 道 界
----------------------	---



七

重

七重

七重の地名は、幾重にも山坂が段々となって高所につながっているという地形を表わしている。大津郡倭山の附近にも七重という所があるが同様の地形である。

「七重は上下二十四戸菅原神社祀られて」と、明治初年小学校の唱歌にうたわれているが、現在でも戸数は余り変わりが無い。

上七重にある菅原神社は古い来歴があると言われる。伊藤作太郎先生の記述や八幡宮阿武家記録によると藤田家が古くより大宮司職をつとめ、多数の文書を伝えている。

吉見氏が大井地区を領有するようになって、吉見家の鬼門を守る神として崇敬せられ、社殿の再興が終る段階になって、樵夫のいたずらのために火を出し、社殿、縁起書などが残らず灰となってしまうと伝えられる。

その後徳山領となっても度々社殿を再興したらしいが、明治の世となり七重の地下持ちとなって今日に至ったのである。

この社殿の西うしろに別舎があって不動明王の木像が祀られている。

藤田家の古文書は次のようである。

阿武郡大井七重村天神由緒書（現代文に直す）

当天神の社は往昔九州太宰府天満宮がこのところへ移され御草創になったもので、堂は南向き、後に高い山が茂り、古木が谷に横たわり、前に池がある。この宮の開基、建立はいずれの人ということとは不明である。

御建立の事

吉見様御領の節、社領を残らず御再興仰付けられた処、樵夫二人が檢敷板をすり合して火を出し、社殿や縁起書は全部焼失してしまつた。その頃の社領は五〇石であったと申し伝えられる。その時の大宮司職は藤田八右衛門であった。

徳山毛利日向守様御領に相成り候節、光井左馬丞様の御役儀の御時分御建立遊ばされ候へ共その後造営出来なかつた故大破仕り、然る処私先祖、代々大宮司やく勤め来り候に付き竹木採用の御願申出、御免許の上、地下氏子相催し今の拝殿建立仕り、祭礼など相調候条御公儀様へ札守御代々差上申候事

畠高三石六斗七升六合

但天神社領御除き遺され候。御証拠物式通日向守様御代、神村得監様御役儀の時分遺わされ所持仕候

大宮司役代々の家名

藤田彦助、藤田太郎兵衛、藤田八右衛門、藤田左衛門、藤田

十郎右衛門、藤田彦七

以上彦助より私迄大宮司役六代相續動来り申候、夫より以前も大宮司相動候得共、縁起等焼失故、家名知れ不申候事

以上天神由緒、先祖より申伝え斯の如くに御座候に付き差出候 以上

阿武郡大井七重村

天神大宮司役 藤田 彦七

亥四月十七日

中原四郎兵衛 殿

(この中原四郎兵衛家は現在の土井オモヤ森重泰博氏の先祖で、この頃徳山領大井の支配をしていた庄屋であった。墓は馬場高堂山にある。)

その後御社人中に紛擾を生じたりしを以て社の見守職、祭礼の節御祭りは藤田彦七より差出し、社殿は阿武帯刀へ命ずる旨、徳山藩内福間十兵衛より藤田彦七宛に申渡しありたり。再興は享保九年辰卯月吉日にして棟梁は、

岡村二郎左衛門 岡村伝兵衛 斎藤弥右衛門

なり。

所藏刀 長サ二尺七寸五分

巾 一寸 一分

製作 盛 国

鏡 (経) 七寸五分

製作 中原吉長

以上が天神社の記録である。

上七重盆地の西高地に大井小学校の分校が建てられたのは明治十二年六月である。

その隣地に小堂があつて信者が時々集まつて仏事を営んでいたが、ここが口碑に伝える吉見家滅亡の所であると言われている。

元和四年(一六一八)八月二十五日吉見長二郎広長は毛利輝元を平安古の邸に招いて月見の宴を行うことになつてしたが、謀反の疑ありとの讒言によつて、不意に邸を襲われ、妻(吉山近江守の娘おふじ)三人の男子と共に自害して果てた。この時大井浦の吉見邸に一人の老母がいたが、縁家である七重の波多野家をたよつて逃げる途中、追手のためにこの処で殺害された。ここに古い墓石が残っていると古老の語るところである。

この波多野家にも大内家以来の古文書や古い系図が伝えられていたが、現在では系図のみが残されている。これによると嘉年の勝山城城主であつたが、吉見家没落の頃、七重に隠棲して

農家となったものである。広沢兵助家の享保書残し記録と一致している。

永田家は土井中原一家、門前河野一家と共に代表的な郷士の家で、近江国永田村より出た永田氏でオモヤ、ニンヤ、本家、新宅、隠居、部屋と称する一族に取りまかれるような形で栄えている。

オモヤ永田隆茂家には奈古代官徳山藩士の松浦種次時敏（松浦漁人と称した）の書いたものが残されている。永田幸生家（向かいのヘヤ）には先祖八代目永田弥兵衛實時が庄屋時代に書残した日記が残っている。これを見ると七重のため池が干上り、うなぎやふなを売って村費にあてたこと、天神様のみこしを後地村へ売ったことなど珍しいことが数々記されている。

中村家も古いらしく、ため池の上の旧墓地には、すずめ堂と称する古い古墓石が多く、各家の墓が並んでいる。かくれキリシタンの墓とも言われている。

下瀬家は吉見家の旧臣と見られるが、萩の乱（前原騒動）に大井出身の関係者金崎竹之助、吉屋百太と共に罰せられて墓だけが永田家の上に残されている。今は萩市内に住んで居られるとのことである。

現在の七重は苗木と稚鶏の生産地として有名となり一躍脚光

を浴びている感がある。

一時は山間僻地の如く言われていたが、今や台上は車道が四通発達して、台上からの見晴らしは、まさに天国である。大自らの恩恵に生きる喜びを禁じ得ない。

大
寺
と
領
家

大寺

大井川の川岸、領家の上流の東端部を大井字大寺という。むかし大きなお寺があったことが地名の起りである。

昭和八年大井川の河床から巨大な礎石が発見されて引き揚げられ、大応寺の石段下に置かれている。

山本博先生の研究調査によって五重塔の心礎であると言われている。

昭和五十九年十一月から今年三月にかけて県教育委員会の専門家によって発掘調査が行われた処、今までは奈良朝時代に僧行基が建立したものであろうと言われていたが、それよりもっと古く創建は白鳳時代と推定され、当時大井川は、遺跡の西方の現坂本集落のある山麓を流れていたものとみられ、瓦の種類が増え、出土数も多いことから奈良時代には隆盛を迎えたと思定された。

この大寺は阿武の国造の系統に連なる豪族で、かつて円光寺古墳や穴観音古墳を築いた阿牟君が仏教の伝来と共にこれを信仰するようになってこの寺を創建したとみるのが妥当であるといわれる。

この後大寺は大応寺文書に天元元年（九七八）「此の郷の川

上に草庵を結び」永観元年（九八三）「伽藍堂社建立」とあることから、この地の附近に大寺が建立されたとみられる。古記録によると光慶寺又は興花寺と呼んでいたらしい。

さらに薬師堂は室町時代に建てられたらしく、文政四年（一八二一）洪水により流失したことが奈古代官所日記に誌してある。

現在大応寺にある薬師堂はこれに移したものである。

大寺附近のスクモ山の麓、県道大曲りの処に古い窯跡があり、大むかしの瓦片が出土する。大寺の瓦はこの窯で作ったらしい。

スクモ山の麓から先ごろ左記のような刻銘のある石碑が見つかった。

文亀元年 辛酉

主 勢忍

七月七日 敬白

主とは施主とか、供養主であり、敬白とはつつしんで申すとの意である。

勢忍という人物は阿武哲也家系図の三十三代阿武式部丞賀時の子、筑後守兼時の兄である。勢忍の名の下に興花寺と記してあるから興花寺の別当と思われる。（別当とは住職とか長官のこと）。大寺はこの頃、興花寺と呼んでいたらしく、この系図

の各所に書いてあり、五重塔の破壊したことが左記のように記してある。十六代寶國たからくにの項に「是は和田義守謀反の時、一類となるの由仰下され、此時より賀年郷六拾石之知行、のち大内殿押領、茲により五重宝塔破れ畢おひら。今に興花寺鎮守之森跡也」とある。(和田義盛は頼朝の重臣であるから人物の名前が間違っているらしい。) これを考えると大内家の勢力さかんとなり防長の守護となった鎌倉時代の終り頃には、阿武家の所領であった賀年郷も、大井大寺も、大井郷全体も、大内家の支配するところとなったが、そのため五重の塔も破壊されるような争乱が起つたとの意味を、わずかに系図の一端にひそかに書加えたものと思われる。

興花寺の鎮守とは、八幡宮のことではなくその当時は神仏一体の信仰であって、寺には鎮守神を祀り、神社には神護寺が神を守ったのである。

阿武系図の時家の項に「此代興花寺の鐘を八幡宮がこれを所望し、不思議なことがあって鐘が二七日(十四日)の間響かなかったが五社を勧請して御祈念したら則ち鐘が響いた」と記してあるが、いろいろと謎めいた書き方である。然しこれほどこの系図にも、大内、吉見、毛利と、どの領主に対しても反感を持たれないような遠慮がちな表現がしてあるので理解が困難

であるが、発掘調査のおかげで少しづつ謎がとけてありがたいことである。

説明が前後となって申訳ないが、文龜元年(一五〇一)は大内義興が九州平定のため七月六日大内家の守護神氷上山妙見社に祈願をこめて、家に伝わる重代の宝剣を献納している。

大井の興花寺でも七月七日にはこれに関連して御祈禱か供養が行われたもので、この石碑がこの時のものと思われる。

この石碑の所に経塚があったのではないかと調査してみたが、五輪塔や宝篋印塔が多く埋めてあった。考えてみるとその辺は墓地であったが、旧藩時代に開作のため旧墓石を取り除いて一ヶ所に埋めて畠にしたものである。

地形から見て興花寺(又は光慶寺)の隠居庵があった跡と思われる。

領家

領家とは領主が国司の圧迫を受けて、權益を侵害されることが多かったので、領主がその領主権を名目的に有力な権力者に寄進して、その保護をうけ、免租などの特権を獲得し、自分はその管理者となることがおこなわれた。そこで本所——領家——預所の関係が成立し、預所から領家へ年貢米を送り、領

家は本所へ年貢米を送ることになっていた。

大井には阿武御領（皇室御領）の管理をする領家代官職が、大寺又は大応寺に置かれていたと推察される。室町時代の末期頃、戦国騒乱の時代となるにつれ、各地の領家の権威はなくなり武家に侵略せられて領家は地名だけが残ったらしい。

光明寺は大応寺の末寺で、この山から嘉永五年に坂本の百姓某が経塚を掘出して、光明寺山経塚と言って世に知られている。その百姓の家に火災が発生したので、たたりを恐れて発掘品を元に戻しに行ったとの流説もあるが、徳山藩に届出た記録によると、石室の中から青銅製経筒（高さ蓋共一尺二寸、口径三寸八分、周廻一尺二寸、重量一貫百匁）をはじめ鏡二枚、剣数本、磁器五六個、檜扇、念珠などが出土した。筒には次の様な銘があった。

康和三年辛己歳四年五月畢

十月二十九日入管供 十一月九日会

願主 天台僧惟超

銅施主 椿 武 則

鑄師 雀部 重吉

これらの出土品はどこにしまわれているのかその所在がわからないのは残念なことである。

康和三年は一一〇一年である。経塚は平安中期以降流行したもので、祈願をこめて経文を埋めた塚である。雀部重吉の名は大津郡日置利生山から出た経筒にもその名がある。

経筒は昭和四十一年円光寺山からも見付かっている。それは萩市郷土博物館に保管されている。

市場、古曾、奈口

市場、古曾、奈口

大井八幡宮のお祭りに十八郷から集まった人馬をはじめとして、海と山との産物も集まって来て、ここで交換売買され、市の河原から附近一帯は盛んに市場が開かれてこの地名となったものである。

まず古曾のことを考えてみると、古曾とは土地の神のことである。古曾又は加奈古曾という地名が諸所にあるが多くは土器や鏡などが出土する古代の遺跡で、加奈古曾とは神のやしろのことである。(柳田国男民俗辞典)

大井の古曾前は八幡宮の起源の地である。すなわち似光法師が草庵を結び、永観元年大応寺を建て又宇佐八幡宮を勧請した所で、影向石と称する巨大な立石があり、八幡屋敷、大応寺古屋敷、宿居殿屋敷跡などと言ひ伝えられている。伊藤作太郎、山本吉郎両先生の説である。

影向とは神佛が姿をあらわすことで、最初に神仏を祀った所を意味する。巨石信仰をする時代があつて磐座(岩倉とも書く)と称して現在でも鶴山の青木様や櫛山のトビ山に残っている。

古曾前には大応寺所有の田地があつて、その処が保寿寺の跡といわれているが、寛文中(一六六二—一六七二)洪水のた

め寺を坂本の古寺に移し、正徳年中(一七一—頃)大応寺の現在地へ移されたとの事である。宮の馬場は宮に参詣した人などが馬をつなぐ場所であり、又この広場で流鏑馬、田楽、相撲が行われたのである。

この処から多数の土器片や石器類が散見されるため発掘調査をすることとなり、大阪学院大学の文学博士山本博先生が調査団長となり昭和四十七年八月から第一次、第二次、第三次と発掘調査が行われた。

その結果、土器、石器の外、若干の鉄製品、玉類も発見せられた。その一つはコバルト色をしたガラス製の丸玉である。当時これを入手する事は煩る困難なことであつて大陸との直接交渉があり、九州を経由せず弥生文化を受け入れたらしい人達の住居があつたことがわかつたとのことである。

宮寺の廟と称せられる痴鈍和尚の廟は、右の発掘場所から約百米ほど東北の山中にある。(松尾有蔵氏所有地)。大応寺文書によれば痴鈍和尚は保寿寺の開山で大内家第十七世弘世の弟師弘の子である。なお二十二世持世の弟教祐(永享八年筑前宗像西郷にて戦死、法名保寿寺殿胤文允盛)の宝篋印塔が並んで建てられている。

もとは瓦葺の屋根の小堂の中に墓があつたのであるが堂は崩

れて瓦が散乱している。古老に聞くと宮寺様と称して崇敬されていて子供の頃よくおまいりをしたと松尾ツモさんの話であった。昭和五十年八月、松尾有蔵氏と伊藤憲介氏と筆者は大応寺様父子を招いて再発見の意味で読経供養をしたのである。

阿武家系図の阿武式部丞善宣の項に「此の代までは大内殿御下知、大井郷は保寿寺殿惣地頭なり。彼の保寿寺殿と申すは御屋形の御兄弟なり。此のかわり目は土佐一条殿御むす子なり」とある。

この土佐国一条家は内義隆の姉の婚家であって、一条房家の四男晴持は義隆の養子となり、大内義房と称し、出雲八杉浦の敗戦にて二十才で戦死するのであるが、神護寺の住持は一条家から来られた保寿寺二世大龍和尚である。

神護寺は永徳年中（一三八三）日尾山の麓に建てられた保寿寺の末寺となった。同寺の鐘が津和野の永明寺に行ったといわれる。

その銘は次のようである。

長州阿武郡惣社八幡宮

日尾山神護寺住持比丘 大龍 敬白

吉見正頼の室は大宮姫（大井浦信盛寺屋敷、法名栄与信盛）で土佐国一条房家の室の妹である。このようなことから当時の

大井郷の権勢が思いやられるのである。

神護寺は地名のみが奈口に残っている。

奈口は、古記録をみると八幡宮の祭礼の時、各所からの献上物がこの奈口から筆頭としてはじまる。又各村の名主たちもこの口から出場したことから名口という地名となったと伝えられ、又むかしから奈古へ通する通路として奈古口、奈口となつたともいわれる。

この金子氏、出羽氏はもと八幡宮別当坊大応寺の常侍をつとめていた旧家である。天保四年八百五十念祭の記録に、

常侍三人 三日間 晝夜御社詰之事

金子清助 金子斧右衛門 出羽林兵衛

とある。この家々をはじめとして諸家の功勞によってお宮やお寺が護持され、大井の文化が守られて来たことは、ありがたいことである。

さらに市場信友会によって八幡宮のお膝もとの『伝統芸能から舞』を護持されて、昭和五十二年山口県より無形文化財の伝承の奨励金を受けるに至ったことは、諸士の御理解と御援助と若者の熱心な努力によるものである。深く敬服し拍手を送るものである。

◎塔の郷石棺群

市場の湯田に続く山を塔の郷という。昭和二十六年四月八幡宮神職阿武哲也氏が発見したもので、この山林の中に数基の組合式石棺がある。

昭和二十七年八月山口県教育庁及び小野田高等学校小川五郎先生等をむかえて発掘調査の結果、五基を発掘した。その中から銅片、白骨、刀片等が若干出たが、古い時代に盗掘された形跡があったとのことである。

石棺の長さは七尺、幅は二尺五寸、高さは一尺五寸である。少し小型のものもある。

この附近に阿武家をはじめ阿部家、松尾家及び市場の各家の旧墓地がある。

庄屋と円光寺

庄屋

庄屋の地名は前にも申述べたように、吉屋家が豊臣時代に大坂城の築城に功績があり大井に屋敷を貰って庄屋をつとめたこと伝えられ、その頃からこの地を庄屋と呼ぶようになったとのことである。

むかし小学校の歌に「庄屋は村の中央で、役場学校立ちならび、施政の行方そなわりて、さすがに村の首府の地ぞ、学びの庭をしたう子が、日毎に道にいそしみて、朝夕文読む声ごえは、ひらけゆく世の響なり。」とうたわれていたことを古老に聞いたが、明治二十三年五月に大井村役場が新築されたのであるから（大井小学校は明治十一年に松尾武一氏の附近に新築されている。）、豊臣、徳川時代から明治、大正、昭和の現代まで村の首府の地を持ち続けてきたものである。

もちろんその間には庄屋の交代が行われたが大した変動がなく施政の方向が定まり、文教の中心も動くことなく、平和な発展を続けたことがわかるのである。

大井中学校附近の奈口川辺で縄文土器が斎藤定先生によって発見され、小学校の校門の処で完全な須恵器の壺が見付かり、さらに円光寺古墳、穴観音古墳の遺跡があるなど既に縄文、弥

生時代の頃から文化の花が芽生え、開きつつあったと思われる。

赤崎、赤田、二町ヶ坪、寺田など条里制の遺構など口分田のむかしを知ることができる。

大内時代寛正元年（一四六〇）、津和野城主吉見弘信二男正楽がこの地に来て、林光山正楽寺を開いた。その時大内家より褒賞として地面三段五畝を下されたとのことである。この寺が寺小屋と称していたが明治六年大井小学校仮校舎となったのである。

赤崎山には赤崎神社（農耕牛馬の守護神）があつて大きな森林であつたが、終戦後この処に中学校を建てることとなり、おみやを城山神社（黄幡社ともいう）に移し合祀して、赤崎の所有者であつた馬場の伊藤通利氏等から土地の寄贈を受けて整地を行うこととなった。村人多数が、のこや鎌、鍬を揮って勤勞奉仕によつて赤崎山が切り開かれ、各戸から寄附を募つて公費の不足を補うことに決し、建築業者原野組の請負によつて直ちに建築に當つた。終戦後の生活困難の中からよくこの大業が成し遂げられたものと当時を回顧して、うたた感慨無量のものがある。

昭和二十四年三月二十六日落成式が行われたが苦勞のあとの感激であらうか今もなお脳裡に浮かぶのである。

昭和二十九年十一月の県体で大井中の野球部が初めて優勝をし、保護者も全校生徒も駅まで出迎え、続いて三輪車に乗って地区内をパレードするなど数々の思い出がある。

昭和三十九年自衛隊のブルドーザに校地の整備をお頼みして岩石の山を開いたのであるが、それまでは鶴はしの労働以外に方法がなかったのである。今から思えば嘘のような苦労を重ねたものであるが今日の整備された中学校の姿を見るにつけても、人々に感謝をせずにはいられない。

円光寺

円光寺は円光寺というお寺があったのでそれが地名となったのである。阿武家系図に円光院に阿武時実の孫勢円と記してある。鎌倉時代に円光院というお寺があったが、寺地はどの辺にあったか不明である。

薬師堂は円光寺の残りの遺跡であろう。古い石像や木像が祀られて、五輪塔や宝篋印塔なども崩されたままになっている。

円光寺山には経塚の出たあとに石蓋がそのまま穴の上に置かれているが、附近には神籠石（かみかごいし）と称せられた巨岩があちこちに散在していた。転落の危険を慮って今は片寄せられた。

箱式石棺が数基あったが表土が流れて、いつの間にか平たい

石も全部失われて今は梅月氏の上の林の中に一基だけ残っている。

円光寺山の連なる頂上を天長山と呼んでいる。ここは昔の城のあとで城山とも言われていて神籠石がある。神籠石とは靈妙不可思議の岩という意味で、古墳か、信仰の神石か判っていない。少し下った処に土こう墓（かみ）の古墳がみつかっている。

穴観音古墳の上方で、はにわ窯が発見されたが、現在ではわからなくなった。

穴観音古墳・円光寺古墳のことはここでは略す。

庄屋、円光寺には古来から無形文化財の伝統芸能チャンチキ舞が伝承されて、毎年荒人神社の秋祭りに奉納されていた。

チャンチキ舞は長州舞とも称して、石州舞に対抗してこの地方では盛んに若者の間で行われていた。市場のかぐら舞もこのチャンチキ舞である。太鼓と笛のリズムに合わせて、舞い、踊り、跳躍する。時には勝どきの聲を上げる姿は、勇壮活発で時間が経つにつれて太鼓のリズムも、舞いも、速度を増し乍ら最高潮に達し、人か神か、神か人か、遂には乗りうつりと称する場面をあらわし、神人合一の境地に導かれる。見るものも演ずる者も無我の神境に達するのである。

素朴ではあるが信仰と芸能とが一体となって古い時代から諸

人の楽しみとした文化財であるが、終戦後だんだんと子供が少なくなつてあとを継ぐ者もいなくなつてすたれて行く状態となつた。

このことを早くから着目して復興を考えられたのが正楽寺の河野泰光先生である。先生は当時の舞の習得者であつた左記の、吉屋伴蔵氏、石丸久治氏、吉屋勘一氏、田中三吉氏、松屋武一氏等

の語るところを聞いて一冊の筆書きの冊子を筆者に渡された。それは左記の通りである。

昭和三十四年十月記

山口県萩市

『大井地区に於ける神楽舞』

長州舞（俗称チャンチキ舞）の由来と現況について

河野泰光

神楽舞の由来

昭和三十年萩市に合併するまではこの大井地区は山口県阿武郡大井村という一邑であつた。この村の部落に本郷、羽賀、坂本、七重、市場、庄屋というのがある。この六つの部落には昔から秋祭りという氏神様の祭礼日には申し合わせた様に当番制

を定めて、どの部落かが主催となつて、その部落が世話をして奉納舞をするのが習慣で、いつの時代から始まったものか、随分古い歴史と伝統をもっている。

古い人の話では出雲に石州舞ができたとのことを聞いて、わざわざ出雲まで徒歩でこの神楽を見物に出かけ、従来の大井の神楽に石州舞の最も良いところを取り入れ大井の神楽の良いところのみを生かして、長州舞としたというのであるから石州舞の始まる前には既に大井の神楽は、神楽としては既に舞つていたということが出来る。

因みに舞の一つ一つを吟味して見ると、あたかも石州舞に似たところもあるが、調子拍子が純然たる大井の神楽は、石州舞のように流暢で単調でない。而も石州舞は非常に服装があでやかであるが、大井の神楽は非常に質素であり、拍子も六拍子で、少し石州舞より早く、若々しい活気を帯びているところがこの長州舞と称せられる大井の神楽舞の特徴でもある。（中略）

茲に長州舞（神楽舞）の由来を述べ、いささか所見を述べて世の先達に訴える事とする。

以上が河野先生の主旨であつて、以下に舞の種類と人名が記されている。

ふりかえてみると、浜田千年、吉屋吉郎、水津金槌、吉屋新一君等が中堅スターとして舞っていた昭和五、六、七年頃までが黄金時代であって、その後みんな兵隊に行き次々に戦死してしまった。現在残っていられる人は

吉屋潔氏、石丸定一氏、松尾二郎氏、松尾武一氏、水津一郎氏、水津良介氏、水津栄助氏、吉屋佐一氏ぐらいで、あとつぎがなくこのまま終ってしまう事はまことに寂しいことであった。

然るに市場信友会のお方が奮起して、子供に伝えておかなければいけないとの気分が盛り上り、公民館長なども夜間お母さん方と会合を持ってこれを説得して賛成援助を求め、遂に今日の如く保存会を結成して、伝承維持して行くこととなったのである。

松尾武一氏からお声がかかり吾々もやる熱意があると言われていたが、前途の如く若者の後継者を必要としていたため、庄屋円光寺は撰からもれて、市場の方が指定されることとなったのである。

河野先生の御主旨もいささかながらこれを継承し得たと思っ
ている次第である。

然し乍らよく考えてみると、前述の如き人士が健康でいられる現在、これをそのまま消え行くを見るのはまことにさびしい

ことである。何とか将来において庄屋円光寺の伝統を生かして、盛り立てるよう努力したいと念願してやまないものである。

馬
場
と
土
井

馬 場

馬場は、大井橋のたもと国光から松崎までの間、旧県道に添った地区であったが、現在では国道が整備舗装されて旧県道に並行して走っている。

荒人神社の附近の馬つなぎ場であった処の上の馬場、鳥居の馬場、下の馬場がこの処の地名の起りである。

荒人神社は天仁元年（一一〇八）出雲大社を勧請して祀り、のちに萩の住吉神社の分霊をおまつりしたものである。

祭神は、

大國主神並びに素盞鳴神

（農業 医薬 商業の神）

表筒尾神、仲筒尾神、底筒尾神

（住吉大神のことで海事交通漁業港灣の神）

勧請の由来を尋ねると、むかし長雨や旱天が続いて五穀不熟のために民衆が大に苦しんだ時、御神託があって村の代表者が出雲に行き、大社の分霊をいただいて帰り宮殿を造営して、大井下村の氏神として崇敬したとのことである。

むかしは庄屋、円光寺、馬場、土井、湊を大井下村と称し、七重、領家、奈口、坂本を七重上村と称していたのである。

当社は武門の崇敬も厚く、須佐の益田弾正が通行の際は必ず敬意を表せられたのであり、又沿海を航行する船舶も帆をおろして停船して、敬礼して安全を祈願したと言われている。

神殿の裏に石棺古墳の跡がある。又天王山てんわうざんと称する山があったが今ではブルドーザによって採土され山はほとんどなくなつた。この処にも石棺古墳があり、八坂神社の石祠があったのであるが、石祠は現在松尾家の裏に移されてある。

一の鳥居の附近に蒙古イカリ石があり、エビス様として祀られている。由来書を略記すると「むかし笹子の浜へ長さ一丈余りの四角の柱のような切石があたり、里人が不思議に思つて群集している処へ一人の旅人がこれを見て、これは蒙古の舟のいかり石である。たくさん蒙古兵たちがこの海に沈んでいる。西の方に霊地があるので、これをエビス様として祀つて貰い度いと狂人のように口ばしつてどこへともなく消えてしまった。これによって今の荒人大明神の社内に移して祀つて尊敬致している。」と記してある。

これは別項で述べたように蒙古襲来の時の遺物で、萩市の文化財として指定をされている。

このお宮には、燈籠や狛犬こゝろいぬなど多数の石造建造物が献納されて、年号氏名が刻銘されているが、むかしから馬場、土井、湊

に勢力を張った中原一家のものが多数ある。

石碑を一つだけ紹介すると、

舞殿土地寄附 伊藤権左衛門

吉屋 孫七

松屋 忠七

天保五甲年(一八三四)八月吉日

伊藤家は現在の馬場伊藤百合恵家で、吉屋家は正楽寺うしろの現在の吉屋公紀家で、松尾家は同じく庄屋の現在の松尾政雄家である。

むかしから大井村の庄屋を交代で勤めた旧家である。天保五年に舞殿の土地を寄附したものである。舞殿は昭和初年頃まで現在の鳥居の馬場の鉄道線路の処にあったので、その附近の土地のことと思われる。その後現在地に移されて馬場上下部落の集会所として使われたこともあった。巨大な材木が使われて建立されているが約百六十年間、民衆のお祭りの場であり、集会の場ともなったことを思うとおろそかにできないものがある。今後も大切にしなければならぬ。

願成寺という地名は同じ名前のお寺があったのである。この寺は大応寺の末寺であったが、本尊は萩の竜昌院に現在まつられているとのことである。

高堂山に高堂庵と称する小堂があったが、のち奈古法積寺末庵となり、現在では立派な地蔵像や墓石が残っている。むかし西行法師がこの処に来て指月山の月を眺め

来てみれば 阿武の松原小夜更けて

指月の山に残る 月かけ

と詠じたと伝えられている。

大井郵便局が大正四年十二月十六日から設置せられて、伊藤義祐氏が初代局長となり、次に伊藤信一氏、伊藤通利氏、河野利長氏、伊藤胤一氏、長見武氏、中村孝史氏と受け継がれ、長見氏の時昭和五十三年一月現在地に移転されたのである。明治時代以前は目代所水津氏が庄屋の命を受けて運輸通送のことをうけていた。

土 井

土井には土井某という人が住んでいたものでそれが地名となつたと伝えられる。鎌倉時代長門守護土肥実平の子土肥達平が実平の代官としてこの地に来たと言われているが、この土井に住んでいたのではないかと考えられる。

大歳神社が祀られている。その東方、いせえだの上の台の墓土地から石棺や土器や鉄器や曲玉が五十程出土したことが嘉永

元年申（一八四八）の徳山藩の古文書に記されている。

掘出した人は水津孫七、片山吉五郎であるが、足輕代勤の千代松が萩に持ち出して聞き合わした処、曲玉というものであることがわかったが、千代松は役所に呼び出され詮議の結果、元の通りに戻し納め、のち又これを掘出すことは相成らざる様に申付けるとの御達しがあつたとのことである。

中原一家の総本家といわれるオモヤ森重泰博氏の屋敷内にある巨大なタブの木は、樹齡四百年以上のもので想定され、村内第一の古木といわれ、藤井氏のタブの木は二百年位といわれている。大きさをよく比較することができる。

オモヤ、ニンヤ、シンタクなど一族集団が共に栄えた好例で、中原一家のお祭りと呼ばれてこの巨大なタブの木の下に一族が集まり、しめ縄を張ってお祭りが行われていたのであるが、近年はやめられたとのことである。

高堂山墓地は明治以前の墓地で、新墓地は松崎の山である。高堂山には中原一家の旧墓が八割方を占めている。伊藤家の旧墓もこの処にあり。庄屋の石丸文男家（現在広島に在住）の旧墓は塔形で中世の姿をよくあらわしている。

高堂山のやぶの中には石棺古墳らしいものがまだ二三基認められている。

大井橋が初めて架けられたのは明治三十五年であるが三十六

年の六月には洪水のため流失した。大正二年十二月従来の設計を改めて柱に鉄を用い、水面下は土管をもってこれを囲い、桁上は厚さ三寸のコンクリートの上に砂を置いたもので大正三年一月に竣工した。工費三千三百円であつた。この橋は二十年間は使用に耐えるという設計であつたが大正五年十月には大洪水のため流失した。再度架設に着工したのが大正五年十月で、竣工したのが大正六年四月である。工費五千三百円であつた。この時渡初式には土井の前森重家の三夫婦揃って渡り初めを行ったのである。

その後昭和十一年三月安藤勝氏が工事を請負い、鉄筋コンクリートにて造られ現在に至っている。五十二年国道となるに及んで建設省によって補強工事がなされた。

国道開通後、歩道橋が両側に架設されたのである。国道（北長門コバルトライン）が開通したのは昭和五十二年三月であつた。

県道が萩から大井に通じ、さらに奈古方面に開通したのは明治三十四年十月で、山崎自動車会社の乗合自動車は江崎まで運行を開始したのは大正六年である。その前は乗合馬車がラッパを吹き鳴らして通っていた。

国光、領家間の県道は明治四十三年十二月起工し、大正元年三月竣工した。その工費は八千円であった。大正六年六月に紫福までが開通し大正十二年九月二十六日に防長自動車会社によってバスの運行が始められたのである。

ちなみに電燈がつけられたのが大正八年であった。

大井川が阿武の松原と唐の嶋の間を大きく右に曲がっていたのを塞いで、元の切れ戸の処を真直ぐに流して、ここを河口とするため、導流堤が造られた。

そしてその大井川の埋め立て工事が昭和五十年十月から開始せられ、五十四年四月には大井保育園が開園され、同年八月福祉センターが竣工し、同年十一月には特別養護老人ホーム萩園が完成したのである。尚また五十六年十月三十一日には老人憩の家並びに上馬場部落集会所の落成式を行った。この時上馬場では旧校舎の資材をこの集会所に充てるため、校舎の解体、運搬などいろいろの労力と、地元負担金の拠出等、物心両面の御苦労があったのである。

以上のように各般の施設が明治、大正、昭和とだんだんと整い、今日の文化の恩沢に浴するに至るまでのあゆみと、人々の労苦の程を知ることができる。

大

井

湊

大井 湊

水門又は水の戸であつて、河口の水の出入りする所、又舟の出入りする所を湊と呼ぶようになったのである。阿武郡江崎の湊、大津郡深川の湊など同じ意味によつてできた地名である。

湊古墳をみると千五、六百年前頃、身分の高い人が住んでいたようである。その頃は入江が門前の方まで入りこんでいたので大船の出入りもたやすく、他国からの船の往来があつたと思われる。

古老の言い伝えによれば、もと小湊に住んでいたが、のち現在の処に移り住んだといわれるけれども確かでない。

大応寺所蔵の古記録の中に、寛保二年（一七四二）二月十五日庄屋伊藤権兵衛、湊庄屋中原弥兵衛の提出した「徳山領大井村由緒石高付」という書物がある。これには湊戸数二十九戸で人口九十九人、船数十そう、年中の漁事としては、正月より二月始め頃まで、川尻にて白魚とり、二月末より六月まで大敷網、鱒類、もつとも南北二ヶ所大敷床御座候事、七月頃より正月まで時々鱒引網、釣漁めばる取り申候事とある。

その後安政四年（一八五七）二月湊庄屋古谷源左衛門の届出総戸数は五十三軒である。

（註）

慶応三年湊小頭弥右衛門、貞右衛門、湊庄屋古谷兵次郎が、代官松浦雄馬を通じて徳山藩へ、湊の船の出入口が砂で埋まつて冬海は全く困るので、その対策として、古川の前後の土手の築立、島開立の願出をしている。多分この頃馬場の古川筋の修補が行われたものであろう。馬場から唐の島へ通ずる石畳の土手が残っていて、洪水にも流失することのない頑丈なものであつたが、国道の工事によつてほとんどが埋められ、僅かに残っている。

末益源右衛門、豊之丞父子が奈古から来て、湊付近の開作を行ったのもこの頃のことである。現在の白上氏の住居は旧末益氏の屋敷であつたとのことである。末益豊之丞夫婦の墓が観音堂のうしろにある。

観音堂から大井川に面する一帯は入江であつたのを、これも明治十五年、古谷与三郎氏が発起人となり、山口県令の許可を得て、明治十八年埋め立て開作が完了し、民家が建ち並んで現在の姿になつた。

観音堂は土地の所有者土井の前の森重氏が寄付をされて堂舎が建てられ、奈古の法積寺の抱えで、古くから崇敬を集めていたものである。

旧藩時代、奈古に通ずる磯平の道に露無しという処があつて

(立岩の付近) 観音堂があった。これを露無し観音と称し、往來の人や里人が大切にしていたが、永年の間に頽廃していたので、これを湊観音に移して、合併し祀ることになったのである。今観音像が三体あるが、すばらしく美しく尊容麟々として輝いている。

堂舎の天井の絵は、阪本の山根征恕先生が書かれたものや、当時の生徒たちの書いたものと言われている。

観音堂の前に久保田伝右衛門の墓と錦見氏の墓があり、年号は寛永二年(一六二五)で、この地区では最も古い墓である。

厳嶋明神、恵比須社は俗に明神様と呼ばれ、巨大な燈籠には天保庚子六月吉祥、当浦両網と刻銘があり、嘉永五年三月寄進の鳥居に、願主山根安吉、当浦中と庄屋古谷源左衛門の名がある。製作者は湊住人の堀金蔵と中原辨蔵両氏である。

一七夜祭が戦後復活し、越ヶ浜の管弦祭の如く、藪籠飾の船団が鶴山の崎を廻り、網屋の恵比須様に参詣して、船上で神事が行われて帰港する豪華華麗なお祭が執行されてまことにみごとであったが、近年は保安庁の海上安全の取り締まりが厳重となり許可がむづかしくなるなど、いろいろの事情からお祭も質素となり、二三艘の船でみこしを守り総代がお伴をしてお祭が行われるようになったとのことである。

青木いなり神社には、謡曲や伝説で知られた那須野ヶ原から飛んできたと言われる「殺生石」(金毛九尾の狐の話)が、大きなしめ縄を張って祀ってある。これが巨石信仰の神石ともいわれる。ごんごういしとも言う。(神籠石のこと)

野々には大きな池のような入江があって、野々神社があったが、今は明神様へ合祀されている。この入江のおかげで命を助かった人は多いと古老の語るところである。むかしは時化の時には青木様の付近は激浪でとても湊にはいることは困難であった。そこで若者たちは入江の付近まで帰るとロープをくわえて激浪の中に飛び込んで船を入江の中に引き込んで、漸く難をまぬがれて、一同山越して家に帰り着くこともあったとの話であった。浦から鶴山の耕作に来る人はこの入江に舟をつないで肥料や収穫物を運搬していた。

この入江も下水処理工事と共に埋め立てられて消えゆく運命となったのであるが、野々ヶ浜と称せられた場所は広い野原であった。今は全部耕作地となっている。

野々ヶが浜で安政四年(一八五七)四月二十八日夜、この頃藩政府から厳禁されていた芝居の興行をしたため、奈古代官所のおとがめを受けて三十九人が罰せられた記録がある。文久三年(一八六五)五月十三日湊川口で起きた大井浦との紛争は、

双方負傷者が出るほど激しいものであった。この解決に当たった湊庄屋古谷源左衛門と浦庄屋久保田甚右衛門等の苦労は大変なものであったことが、奈古代官所日記にさまざまに記してある。

のちに双方の漁業者を全員周禮寺に集めて、向後円満に生業に励むようお願いかせがったのである。

明治初年までの湊庄屋をわかっただけ列記してみる。

元禄年間（一六八八〜一七〇三）中原四郎兵衛

寛保年間（一七四一〜一七四五）中原弥兵衛、古谷九郎右衛門

文化、文政年間（一八〇四〜一八二九）古谷長左衛門、古谷吉右衛門、古谷松之助

天保年間（一八三〇〜一八四三）中原源助、三吉栄助

安政・文久年間（一八五四〜一八六三）古谷源左衛門

文久・慶応年間（一八六一〜一八六七）吉屋友之丞

慶応・明治 古谷兵次郎、古谷兵助

古谷源左衛門は父吉左衛門、祖父長左衛門と三代庄屋を勤めたが、魚問屋を業とし、随分湊のために働いた家である。墓は嶽にある。古谷泰敬氏は分家である。古谷源左衛門の墓は弟の古谷孫作が建てている。孫作は三隅の某家を継いだ、小島の長

嶽家から正樂寺先代河野景信師の奥さんサト母堂をお連れした人である。古谷甚吉氏の話である。

文久二年（一八六二）二月十五日に鶴山の松植えが行われた。

徳山領の百姓を六組に分けて合計千八百八十五本が植えられた。

これも代官松浦雄馬の鶴山の将来を考え、村の利益を考えての献言によってなされたことが代官所日記に残っている。この松は今一抱えほどの大木となって、防風、魚附保安林となって鶴山を囲んでいるが、松食い虫やその他のためにだんだん減少している。

湊、土井、馬場の川ばた付近では海産物の製造がおこなわれていた。文化文政時代には、鯖切漬、鮑、うになど代官所を通じて、徳山藩公へ差し出している。明治、大正、昭和初年にかけて、鱈しめかす、鯛の製造が盛んで、下関、神戸、大阪方面へ出荷されていた。特に鯛の品質は全国一位で、相場表の筆頭は長州大井鯛と書かれていた。その頃の製造家は重富、岩崎、三吉、吉村、森重、綿屋、吉屋、松尾各氏であった。

その以前の明治中頃までは、大島から藍を多く産出し、大井の藍商人が長い間繁盛したと言いつたが記録はない。大井には各地に紺屋（コイヤ）という家が多く、これが藍染屋でみな有力な家で、庄屋、畔頭などをつとめていて、当時の繁

盛ぶりを物語っている。湊と浦に荷揚げされて運搬され、染料に製造されるのを、子供の頃よく見ていたと、浦の古老から聞くことができた。

昭和六年に馬場から大井川河岸に沿うて、二間幅の道路が新設され、船、車共に交通の便が開け湊が発展する基ともなった。

それまでは夏みかんの積み出しも橙船だいごいぶねと称する大船が馬場の道路の端の川岸に横付けとなり、馬車でバラ積みのまま、船にころがし積み込んだものである。門前でもこの積み方を行っていたのであるが、この頃の河の深さはまだ大船が門前まで往來することが出来たのである。

道路の竣工碑と湊導流堤の建設碑が明神様の社前に建っている。

戦後豊漁に恵まれ、魚介類の需要も増大したため漁家の収入は倍増し、各漁港共面目一新して漁船は大きく新造され、家も新築改築されて、次男三男は分家し、漁業組合の舎屋は次々と新築改築されて、未曾有の繁盛ぶりを示して漁村は膨張につぐ膨張で、近辺の新開地を求めて発展してゆく姿は、大井も越ヶ浜も、小畑も玉江も、どこも同様で、国の力が回復し増大してゆく姿を見るようであることにうれしい極みであった。

これはひとえに漁協の指導のもとに、諸士が相互扶助の精神

と共存共栄の精神を発揮されて、郷土振興の熱血を注がれた賜物である。

今後はさらに先輩の遺業を継いで、技術の進歩と魚族の保護増殖にも意を注ぎ、漁獲高の減少を防ぐことが肝要である。

それがためには人類だけの発展でなく、人間だけの共存共栄でなく、魚族とも共存共栄し、禽獣虫魚草木あらゆるものと共に発展する理想をもつことが必要である。

湊とはソウ、人が集まる所、みんなと一緒という意味がある。皆と一緒に頑張り励んで今日のように共栄和楽の郷土を築きあげてきた。さらにさらに前進することを祈念するものである。

湊に漁業組合がはじめて創立せられたのは明治三十五年十月二十七日で、組合長は白上為吉氏であった。因みに大井浦漁業組合の創立は同年九月二十二日で組合長は松浦一郎氏であった。

昭和十八年には大井湊と大井浦両組合が合併して大井漁業会となった。昭和二十四年水産業協同組合法施行に伴い、大井湊漁業協同組合となった。その後一時阿武湊漁業協同組合（組合長中原滝三）が別にできていたが、昭和三十四年二月一日両組合が合併した。現在大井川河口の阿武の松原海面の風光絶景の処に新しい大漁港が完成間近で益々大きな期待がもたれている。

湊出身の金崎竹之助は奈古の土田五郎丸とともに奇兵隊の豪

勇として有名な隊士であったが、明治九年の萩の乱には前原一誠の部下となり町田梅之進等と軽い刑に服していた。

明治十年二月西郷隆盛が薩摩で新政府に反抗の兵を興したと聞き、町田は「この機に乗じて前原の意志を継ぎ、政府改造の目的を果たそう」と決意し、五月五日ひそかに土原の町田宅に同志を集めた。その時竹之助は兵糧方として再びこの事件に加担した。松本二郎先生著「萩の史談雑録」に詳しく記してある。

前原一誠と町田梅之進と金崎竹之助等との間には特別な深い関係があったものか、再び乱を起こした町田は銃丸にあたり自刃し、竹之助は重い刑に処せられたとのことである。明治維新の犠牲者と思うとまことに気の毒に思われる。

土田五郎丸の弟松之助は田中家の養子となり、田中満氏の祖父である。

金崎竹之助の隣家に久保田万九郎（かど名を板家といっていた。）がいたのであるが、明治十年三月十七日西郷隆盛の乱の時、官軍の中にあつて、肥後国山本郡二股村進撃中に戦死を遂げた。年二十四歳であった。墓は湊尻の金崎家の裏側の墓地に奇兵隊墓が建てられている。

これらの人は明治維新の志士の中にあつて活躍した人達であつたと思われる。

湊と浦には渡海屋と称する北前船の業者があつて、山陰鉄道が開通するまで北浦の回船業が盛んで、下関から江崎までの船、四八六〇艘が浜田の船宿帳に記載されている。

その中に大井湊住吉丸三吉又五郎、大井浦栄徳丸栄徳屋、神徳丸久保田久七、金吉丸鉄山惣七、宝栄丸伊藤藤七、水津政五郎などが見られる。

阿
武
の
松
原

阿武の松原

弘仁二年（八一）八月朔日の阿武伊駅が設置されたが、この頃から阿武の松原と呼ばれたらしく、駅は阿武伊の本郷と言
い、阿武の松原より十四、五町東の方と書かれてある。

古都大井の変遷をながめてきた阿武の松原は、古来歌人により、さまざまのおもいを歌われている。

○ 拾玉集 慈鎮

さまざまの心つくしに行く舟や

帰る姿にあぶの松原

○ 文永元年十二月内裏三首歌に寄松恋

大納言良教

誰がためかあぶの松原名をとめて

我につれなき色を見すらん

○ 正平十八年内裏百首の歌の中の旅の恋を

妙光寺内大臣

思ひ立つ心つくしの行く末に

哀れとたのむ阿武の松原

○ 伊藤家にて 澤 宜 嘉

縁そふ阿武の松原もろともに

常磐の宿は千世も栄へむ

○ 西行法師が高堂庵に来た時の作として伝えられる。

来てみれば阿武の松原さよふけて

指月の山に残る月影

○ 地下上申の中に

恵みあれば千とせの秋のくもりなき

こよいの月にあぶの松原

などの名歌が残されている。慈鎮は関白忠通の子で、源頼朝の顧問役九條兼実の弟、慈円のことで、阿武家先祖となった北条時実や西行法師とも同時代の人で、有名な歴史書「愚管抄」

（神武から順徳までの歴史書）の著者である。早く出家して四たび天台座主になった人である。

安政五年八月十八日、松下村塾の弟子たちと明倫館の松陰先生の弟子たち合同の山鹿流銃陣大演習が大井浜と呼ばれたこの処で行われた。この時松陰先生は自宅謹慎の身であったので飯田正伯が指揮をし、富永有隣が先生の指図に従って「操練当日の次第」「当日の条々」を書いている。このことは村岡繁氏著「吉田松陰を語る」の中に書かれているが、世間に知られていないので、ここにくわしく書いて置く。当日の条々とは、

一、各隊の戦勢、中軍より制すべからず。もっとも戦地の指

示は中隊より出ずることにつき各隊、決して違背あるべからざること。隊長は伍長と団体にて諸事申談すべく、隊長より命ずる旨伍長自由に増損すべからざること。

一、伍兵は伍長の指揮に従うは勿論、伍尾は伍長の及ばざるを補うの心得専要たるべきこと。

一、旗役は、専ら隊長の命令に従い、隊長の欠を補う心得甚だ以て肝要たるべきこと。

一、階級持方らしき儀、一向申出ず勞役のこと。尊卑にかかわらず長幼を論ぜず各親睦の心得専一たるべきこと。

右の条々申すに及ばぬことにあれども三令五申は軍中の常につき、事らしく書き付け置くところくだんの如し。

安政戊午八月 兵学場各中

この厳格な訓令（厳格な中にも最後の一条は松陰先生一流の暖かみがこもっている。）を定めた大掛かりな銃陣演習に参加したのは、明倫館の兵学門下と松下村塾生および松陰先生に銃陣の教授を受けるため、二十日余も塾に宿泊していた豎田家（都濃郡湯野戸田六、一二六石の筆頭寄組）の家老の河内紀令（九十五石）以下二十六名の壮士連であった。

操練の打ち合わせもすべて明倫館内でおこなったと見られる。

「訓練願書控」というものがのこっていて、「来る十五日（十

八日）当島宰判大井浜において山鹿流備立調練仕り金鼓、貝、小旗、小銃等相用い度存じ奉り候。もつとも大砲等取り扱い候儀これなく小銃も玉なしにて諸事往来地下人等へ相ささわり申さざるよう仕るべく候間（もし雨天の節は二十日）何卒差し免し下され候様願ひ奉り候。」と行事を公然のものにしており、また参加予定者への回文案に

「回文をもって御意を得候。然らば来る十五日……仕るべき段願出候。右に付き十三日明倫館において諸事談じ備立打ち合わせ致し候間御くり合わせを以て御出下さるべく候。」

とあり、明倫館兵学門下あて召集文を発している。ではこの演習実施方を松陰先生に強く要請した人物は誰であったか？ 松陰先生が松浦松洞と吉田栄太郎あて書簡に

「今日十八日よりは流儀の操習にて大井浜へ皆と出発、銃陣短兵隊等これあるなり。この起こりは豎田家家来河内紀令大いに奮発、二十六人位壮士を知行所より召し出し練兵を頼み、当月朔日より松下村塾に於いて日操致し候よりの事なり。」

とあるから河内紀令その人であったことがはっきりする。河内は三月さきに松下村塾で結ばれた伊井大老のふところ刀であった老中間部下総守を要撃して天誅を加えんとした血盟の一人であったといわれる愛国血気の士であった。この大演習が城下人

士に与えた衝撃は大きく、豎田家の士に比べて城下の士は気合がないと評判されたとのことである。松陰先生にとっては非常な自信を深めることとなり、これから松陰先生の活動が積極的となり自立つようになったと言われる。

八月十八日未明寅の刻（四時）、村塾に勢揃いの陣笠、腰兵糧三度分（三百七十匁）を携行、稽古胴衣、稽古袴、銃隊は小銃六匁玉から十匁玉までの胴乱首懸、短兵隊は稽古槍、竹刀、短銃等、伍長は鞭又は袋竹刀、隊長は白旗采配を所持、一番員で兵糧つかい、二番員で列を正し、三番員で出発、行軍は一伍づつ段々に繰り出し、大井浜へ着し、備えは三ヶ所に畳む、左隊右隊は銃兵とし中軍は短兵、休息少時にして貝鳴り、序鼓、中軍の向かう所に随い布陣す。

松のみどりを映して金鼓鳴りわたりホラ貝うなり、砂塵をけたてて旗さし物がいく。げに大井浜に繰りひろげたお家流兵学公許の大絵巻は松陰先生が半生に味わったことのない感動であり、出獄幽囚中の松陰先生傘下に明倫兵学門下が、かくまで大挙参集してくれようとは夢にも期待しえなかったであろうと記してある。

阿武の松原は松陰先生の運命にも影響を及ぼしたことを思うと、感激またひとしお深いものがある。

横山の上山台に砲台ができたのもこの頃のことである。これも覚えている人も伝え聞いて知っている人もほとんどない。

明治元年、時の当島代官杉梅太郎先生（吉田松陰先生の兄）によって阿武の松原の松の植え継ぎが行われ、現在一抱えほどの大木に成長し、保安林となっているが、松食い虫のためなどにどん枯れて憂慮すべき状態である。松原の畠の開作もこの時行われた。

昭和四十三年頃松原海面の侵食が激しく、ひどい所は砂が崩れ流れて約二間位の高さの段となっていて、このままでは松原は全部流れて無くなるのではないかと心配されていたが、菊屋市長にこのことを訴えたところ、早急に全部コンクリートで防禦工事がなされて安堵したのであった。この頃砂の崩れた所から杭が二間おきくらいに立てられていたのが出てきた。何のためか立てられたのか疑問である。

前松原（旧萩領を前松原、徳山領を先松原という）の三段土俵は荒神様の下の松原にあったが、阿武の松緑之助が天保年間毛利敬親公のお抱えとなり、萩に来て大井で土俵入りの披露を行った時の三段土俵と呼ばれて有名である。緑之助は能登国西海村の生まれで、江戸に出て修行し、天保十一年横綱となり、嘉永四年（一八五二）六十一歳で江戸で没した。墓は金沢市寺

町立像寺にあるとのことである。

近年までは阿武の松原と唐の島には、とび、からす、ほおじろ、めじろ、もずなど小鳥たちの巣が多くあって、さえずり遊ぶ声も聞かれて、小鳥たちの楽園であったが、国道が出来てからはだんだんと少なくなり、今ではほおじろ、めじろの声さえ聞かれなくなった。

海に直接つながる大溝では春から夏にかけて、小川に登る小魚（はぜ、あゆ、ごり、うなぎの稚魚）が無数に見られていたが、近年では全然見られなくなった。これを見て思うに人間社会の発展開発が禽獣虫魚の住所を侵害し、彼等の生存をおびやかしているのである。これでは人間の発展もやがては行き詰まりとなるので（魚族貝族の減少による漁業の不振など）、この点に思いをおよぼし彼等との共存共栄を考えなければならぬと痛切に思う次第である。

大井浦、後地、貞平

大井浦

大井浦は、吉見広頼が萩指月の屋敷に居住した頃には津屋の浦と称していた記録があるが（津屋の浦よしや吉見の城あとにむかしを語る山桜花。）、多分九州の津屋崎、鐘崎方面から移住してきた人が多くあったので、その頃、津屋の浦と呼ばれていたものと思われる。下関の史家伊藤彰氏の鐘崎海人の移動と題する発表を見ると、

一、大津郡大浦には永長年間（一〇九六年頃）または正長年間（一四二八年頃）に九州鐘崎から移住したとの言い伝えがあり、また天正年間（一五七三〜一五九一）に五島から移ってきたとの説がある。

二、豊浦郡六連島、安岡、蓋井島、室津、厚島、湯玉、矢玉、滝部、角島、その他大津郡、阿武郡各浦港へ九州鐘崎及び大島から移住した人たちの墓や過去帳が明治初年頃まで各地にあるものを調査して発表してある。

これを見ると随分古いむかしから鐘崎方面との関係がある。九州松浦を根拠とする松浦水軍の出城と言い伝えられて、松浦家が約百軒もある大井浦との深い関係を考えることができ、むかし九州津屋崎からも移住して来た人があったと見られる。

九州津屋崎の風景とよく似ているところから、津屋の浦と呼ばれていたが、のちに大井浦と呼ばれるようになったと考えられる。

吉見正頼、広頼の墓の下に李家と井原家の墓があるが、この処を井原家が開いて萩から円通寺を引いて建て、周鷹寺と称して吉見家の菩提寺とした事が古文書にも記してある。寛文六年（一六六六）六月、吉見広頼の娘と結婚して吉見家を嗣いだ吉見就頼（吉川彦次郎）が、周鷹寺の普請をしている。その時の処に移したとみられる。

浦の旧墓地（堂見塔と原の墓地）を見ると、宝篋印塔の墓石が数基分が散在している。これは足利時代に相当有力者がいたもので、多分、井原氏か李家か玉井氏か三井氏か松浦氏の先祖の墓ではないかと思われる。

文政十二年（一八二九）十一月、大津郡通浦の漁船に乗り組みの五人が遭難して溺死したが、その慰霊の地藏尊が建てられている。願主当浦中、世話人萩浜崎町、田中平蔵と刻銘がある。

その他大井浦は古代から櫛山の山上山麓に多数の遺跡を残しているが、漁業組合三十年の記念誌に大体のことを書き残しているののでここでは省略する。

後地

後地は、もと浦と共に櫛山半島に集団する村落で、この二つの集落はもともと一つであって共に漁業に従事していたが、万治三年（一六六〇）正月二十八日暴風に逢い、両浦の漁夫は打瀬の辺まで漕ぎ帰ってきたが、終に十八艘が難破して、残りの者は一心不乱に高倉荒神に祈願して、ようやくにして助かることができた。このときから漁業を廃業して専ら農業に従事するようになったと古老の言い伝えるところである。

天保年間にできた風土注進案には、萩領大井が本郷組、羽賀組、門前組、後地組とわけられ、後地組の中に相崎（九軒）、後地（三十八軒）が記されている。

浦につづく後の地という意味から出た地名で、諸所に後地と呼ぶ地名がある。大井後地は風土や交通の便利に恵まれた土地柄のため早くから発展し、県道が開通し大井橋ができる頃は、商店が立ち並び、産業組合もはじめ後地久保田家にあったがのちに大井橋のたもと付近に建てられるなど、後地は膨張を続けて家数、人口が増えたため、終に貞平地区が分離して、今のように浦、後地、貞平となったのである。

明治七年、大井浦約八段を開作した県庁記録がある。久保田

清武氏に聞いてみると、田中自転車店の後の地をこの時開作したとのことで地名を開作という。

明治二十九年頃にはこの地区を川西区と呼ばれていた記録（水産業組合人名簿）があるが、なぜか川西区という呼称は全く残っておらず、旧藩時代のむかしの呼び名の、前大井（萩領大井）、先大井（徳山領大井）の名がいまだに時々聞かれる。

この地区は慶長年間に吉見広頼が萩の指月屋敷から、大井浦の屋敷へ移って来た頃から、吉見家の老臣たちは、旧来の想いや、習慣を絶ちがたく、ぼつり、ぼつりと旧主の跡を慕って浦、後地、羽賀、本郷をはじめ大井の全域にわたって帰農して住んだと伝えられている。

後地には明治二十年頃久保田幸造氏という大人物があらわれて、明治三十六年から明治三十九年まで大井村長を勤めて莫大な功績をあげ、大井の発展進歩に頗る尽くしたことを伊藤作太郎先生が記述していられ、村長退職後は大井の産業組合の創始（明治三十九年五月一日）をせられ、今日の大井農業協同組合の基礎を作り固められたことも記されている。大正八年十二月二十八日没せられた。墓は貞平松原の墓地にある。

八坂神社はもと疫^イ神社とも祇園社とも称せられていたが、永享二年（一四三〇）創建と伝えられる。豊臣時代にはこの処で

朝鮮出兵の大船が造られたが、遂に海におろすことができず朽ち果てたとの言い伝えがある。この処の地名を堂見塔と称し、寺院堂塔の跡と思われる。鎌倉時代蒙古襲来の時この国土を守つた大将と言われる見嶋康朝の墓（永仁六年三月十日沙弥浄尼の銘がある。）やその他多数の古墓石があるが、これを見てこれを思うに、鎌倉時代にはこの付近は相当に開けていて、寺院堂塔などが建てられていて、見嶋一族やその関係者たちはこの付近に住んでいて、邸宅もあったと思われる。八坂神社付近の地形や、見嶋康朝の墓付近を見てこの感を深くするものである。

大正年間養蚕の盛んな時代に共同養蚕場が建てられて、近年になり公会堂に使用されていた。本年はこれを取り壊して新しい公会堂が建築されたが、古来から由緒ある土地柄であることを地名や古墓石などがこれを物語っている。何となく霊を感じる浦後地の土地である。「地霊は人傑を生ず」と言われているが久保田幸造氏のような大人物が次々とする土地柄である。むかし高歳（向西）寺もこの付近にあった。今は地名だけが残っている。

貞 平

貞平の高倉荒神社は正しく言えば松原山三宝明王堂と称する。

応永十六年（一四〇九）大内家の執事金子春種が大内盛見の命を受けて建立したと伝えられる。

なお一説には大永年ちゅうの頃豊浦興種という修験者が来て、この山に小庵を建て三宝荒神の像を安置して近郷を廻って山伏の業をしたのが当社のおこりであると伝えられる。三宝荒神の像は運慶の作と言われている。昔から御開帳仏と伝えられて特別のお祭以外は拝観が許されなかったが、本年は御年祭にあたり、専門家によって修理がなされたとのことである。

山本吉郎先生が書き残された大井地区年表によると高倉荒神様の再興造営などの記録は

応永十六年（一四〇九）創建

永祿二年（一五五九）再興

天正十四年（一五八六）高倉荒神社沙汰物控

寛永二十年（一六四三）三月二十六日真応院開基常庵坊没

す。

寛文六年（一六六六）高倉荒神社棟札願主堂守良波

正徳二年（一七一二）伊藤権左衛門鐘を献納する。（治工

郡司信之）

天保十四年（一八四三）九月二日荒神社社領及び境内につ

いて願出る。

明治十八年（一八八五）荒神社真応院から周鷹寺しゅうたか抱えとな
る。

以上のようなことが書き残されている。

なお真応院所蔵の万事由来記録覚には

当島宰判大井村の内、後地村松原山三宝大荒神の儀は地下惣
鎮守、地下悩みの社にして往古より有之、その節は津屋の浦と
申候。永享二年再興御当国にては三宝の大荒神惣社の社領御除
地の畠地二反二九歩、高三斗六升有之、社領の山まで有之、元
禄の時節は堂守山伏長巖が守護仕り、その後蓮華院相勤め、
病死、孫蓮華院も病死に付き只今は真応院と申し山伏堂守神役
相勤め守護仕候。真応院元祖常庵坊が享保年中に、松原山荒神
社中興仕り、長善坊僧都二世長巖坊僧都、四世蓮華院宗樹法院、
五世蓮華院泰順法院、六世珍栄坊まで代々御本寺より継席許容
相成り、珍栄坊まで荒神社を守護仕り、国家安全五穀成就の御
祈禱を常時相勤め候処、のち蓮華院師弟共病死仕り空席に相成
候故拙僧儀、珍栄の弟子に付き、地下御衆中より總代として金
右衛門殿、孫七殿を以て御本寺兼学院年行事役所まで仰入れら
れ、これに依り御本寺より先師珍栄跡相統許容相成り候。
と記してある。この記録は七世秀峯が書いたものである。いつ
の頃か八幡宮の神職阿武氏が社職を掌っていたが、のちに蓮華

院、真応院、など修験者の受け持つところとなり、明治十八年
頃から周鷹寺の抱えとなった。

真応院は京都上京区聖護院（天台宗）の末寺で開基は常庵坊
僧都で、寛永二十年三月二十六日没した。墓は荒神社の参道石
段の左側、渡辺家の後方にある。常庵坊のあと七世秀峯坊、八
世良学、九世良秀、十世良夫、十一世秀峯と続き現在貞平の岡
村家むらかみがその流れを汲む旧家である。

参道の石段や鳥居、狛犬など献納者の名前や地名が刻銘され
ていて、門前河野長右衛門や浦玉井嘉右衛門などの名が見えて
いる。

石段の中腹のまがり角の辺に歌碑が建っていて、

古枯松ふるくす渡れば北は唐の島

千里ゆく花はとらの尾と見え

文政六年と銘がある。

下の国道に面したところに芭蕉の句碑があり、天保二年三月
十二日

松風の落葉にみづの音涼し

この頃大井でも歌道俳道が盛んに行われて、馬場伊藤権右衛
門、松浦雄馬、土井森重吉右衛門などその道の達人であったと
のことである。

昔は七十余名のものが毎年正月二十八日に集まって祭事をしてきた。この日は浦後地の漁船が暴風のため十八艘が難破した日であったのでこの日を祭日と定めていたが、明治四十年頃から三月二十八日に改められた。近郷からの参詣者多数で付近一帯は市をなして盛況を極めたよしである。江戸時代は仙崎鯨組から荒神社に金品を献納して参詣した記録が鯨組に残されている。

荒神社の縁起書に「神勅によってその年の水と世の割合を知ることを得る古来の慣例あり。また護串まもぐしを作り神前に供えたものを農民にわかち、農民これを苗代田の水口に立て、病虫害を除く守りといひ伝え、近郷近在は勿論、遠く佐波、大津、美祢各郡農民の信仰は実に大なり。」とある。

昭和初年鉄道開通以後は荒神祭と言えば大祭で臨時列車や臨時バスが出る盛況振りであった。近年はまた当時のような復興が見られ特に植木市は繁盛である。

これは神社の御膝下の役員諸氏をはじめ住民各位が敬神崇祖の赤心をあらわし、日常の家業にはげむかたわら郷土愛につくしていられる賜物である。

門前、猪熊、相崎

門前

門前には大光寺、長音寺というお寺があつて、その門前であるのでこの地名を呼ぶようになった。大井八幡宮の古記録の中に大光寺殿という記載が見られていた。

長音寺はいつの頃か三見へ移されて、現在三見駅の上方面にある潮音寺がそれであると伝えられる。

門前には住吉という地名があり、昔はこの附近まで入江であつて船も出入していた処から住吉神社が祭られていたのであるが、地形も變つて田畑となり、お宮も山の上に移されて現在の住吉神社になったとのことである。

この処にむかしから住んでこの地方を開発し勢力を張つた一族河野氏が、大河野を中心としてオモヤ、ニンヤ、シンヤ、本家、新宅、目代所、二軒屋など、一族集団が相栄え、相連合して幾百年を生き続け、栄え続けてきた。これはまことに壯観であつて一族繁栄の代表的な姿がよく残されたものである。

このような例としては七重の永田家、庄屋吉屋家、土井中原家（森重家）、浦松浦家、後地久保田家などその他あげれば数々あるが、このように美しい姿をもつて、いつまでも栄えることを祈らずにはいられないものである。

明治元年杉梅太郎先生が阿武の松原に松の植継ぎをなされた時、毛利敬親公がこれを検分に来られ門前の河野徳右衛門の家に立ち寄られたとの記録が「学圃杉先生伝、中村助四郎著」の中に左の通り記されている。

明治元年二月、巡視を仰ぎたる上申書

一、大井、阿武松原にて、畠開き、松苗植継ぎ等、最中御覽。
一、門前（大井村門前）にて、御蔵許付、徳右衛門宅、御小休徳右衛門とは御蔵許に勤めていられた河野徳右衛門のことで篤衛とも称し、大井村長を勤めた河野友太氏（明治二十六年から明治三十年まで村長）の父である。

七郷の一人澤宣嘉卿もしばらくこの家に潜居していて徳右衛門はいつも御相手を致され、今も砲術の練磨に使用された大砲形の石が残されている。その外澤卿の書かれた書画が所蔵されている。邸内の庭は阿武郡第一といわれた豪壮なものであつた。大光寺山の南面には観音堂があり、美しい観音像が祀られて附近の河野一族の守護と信仰者の尊崇に支えられて残っているが、これがむかしの大光寺又は長音寺を物語る遺物ではないかと思われる。

大光寺跡が、河野土建の社長によって古基石なども整えられて、すばらしく大きく立派な宝篋印塔が発見されるなど、大光

寺のむかしの姿を想像することが出来る。

山中に新山家、重家など代々の墓がある。新山家は嘉永時代の分限帳を見ると四家あるがみな大組の士である。萩藩閥録によって調べてみると、甲斐の武田新羅三郎義光の子孫で、はじめ新屋と称し、永称十二年（一五六九）大内輝弘が山口乱入の時これを攻めて切腹せしめたがこの時、輝弘は「私の首と、この刀を貴殿に差上げるから手勢の者どもは無事に九州に帰らして貰い度い」と申出て、刀と首を新屋右衛門実満が受け取った。その刀は今も家に伝っている。のち天正年中輝元の命で、織田信長に攻められている本願寺光佐を助けに行き、門跡から弥陀の絵像を拝領して現在末家に持ち伝えている。その後、姓を新山と改め新山肥前守元村が（若名新屋喜十郎）朝鮮との合戦九年の間二度も渡海して働いたことなど新山十郎右衛門信政が書き残していることが記してある。馬場の伊藤家と親類の家である。

大井八幡宮の池のほとりに石碑がある。

外國を打ち平げて武士の

御代萬代と遠し石不^{いしふ}ミ

従四位勲二等 新山春太郎

この人が新山家の当主（新山彦五郎の後継者）であったが、

その子息莊輔氏は農学博士（正三位勲三等）宮内省千葉県三里塚牧場長として千葉県の方に住んでいられたとのことである。養子敏介氏は藤田鋳業に勤務、長男良太郎氏がある。

重家は萩領大井後地の畦頭^{くまがし}をつとめた家である。現在の貞平三好家が元の重家の屋敷であったとのことである。重仁左衛門が萬延元年、庄屋森田忠助の代理として、徳山領大井庄屋伊藤民次郎と大井川井手のことや、水田の水配分のことなどで、しばしば交渉したことが奈古代官所日記に誌されている。

大光寺跡のすぐ傍の矢野家は、墓銘に天文六年（一五三七）矢野喜左衛門とある。大内時代の人であるからこの大光寺と関係のある人か、又は新山家との因縁のある家ではないかと思われる。

門前出身の偉人河野恒吉、滝原三郎の両氏のごとは別項で少し申述べたが重複をいとわず述べると、両氏は実の兄弟であつて、新宅河野房祐氏の子息で兩人とも猪熊峠を超えて萩中学の前身の明倫館に通学せられたとのことである。

恒吉氏はのち幼年学校、陸軍大学に進まれ、日露戦争には第二軍に属して出征せられ、戦争末期には参謀であつた。凱旋後七年間参謀本部。明治四十五年朝鮮総監府付武官。その後第一次世界大戦中ヨーロッパにおもむき、大正十年八月、少将で退

官。軍人生活三十一年の後、大阪朝日新聞社にむかえられた。その間常に軍備縮小を説いた平和論者で有名であった。新聞社に腰をすえた恒吉氏は粒よりの報道関係者を主体とした研究機関、木曜会を握っていたとのことである。

元九州大学教授檜垣元吉氏の書かれたものによると、河野恒吉著「国史の最黒点」は前後編を合わせると一、〇〇〇ページを越す大著である。満州事変の前後から筆を起して暴走する軍の姿を描き出した記録としては一級品と見受けた。軍の楽屋裏は手にとる如く、踊る大小の役者もこの河野恒吉氏にあってはかなわない。要するに河野氏は大正の三浦梧楼と言うべきであろう。長閑の中に封じ込められなかった長州人としての面白さを展開して見せてくれるのがこの人で、軍閥の実体は彼の生涯をたどることによって明らかになるであろう。そのために少将どまり、朝日入りとする路線が生まれたとすれば、近代日本にとってかなり大きな鉅脈であると考えてよさそうであると述べてある。

昭和二十九年五月十九日東京で逝去せられた。実弟の滝原三郎氏も下関要塞司令部長官を最後に少将で退官せられた。萩藩士滝原家のあとを継がれたとのことである。

思うにこの河野、滝原兄弟は大井に生まれ育ち、少年期を大

井に過して、大井の農漁民が貧しい生活の中で明治、大正の激動期に国の運命を切り開いていく姿を、門前の家の中で父兄と共に見、時には田畑や山で手伝い働いて、つぶさにその情状を身を以って感じ乍ら成長せられたにちがいない。

上京して官職につかれたのちも、郷土のことが脳裏にあって気にかかり、しばしば帰郷されて郷土の実情を見、また吾が意見を述べて講演して郷土民に話しかけるなど、時には上京する郷土人の世話をして学校に行かさるなど、まことに愛情こまやかな軍人であった。

檜垣元吉氏が評して「河野恒吉は朝鮮でも吾が身をつめて人の痛さを知る人物であり、時代の流れをわきまえた將軍であった」と述べていられる。その言葉の通り仏様のような恒吉氏は軍閥といわれる普通の軍人には、とうていなれなかったのであるまいか。

この人の光が郷土の人に支えられていつまでも世の中の光となって輝くことを祈るものである。

門前の山からも古墳が見つかり、出土した壺は東京博物館に納められたとのことである。

鉄道線路に添って猪熊に通ずる通路の右側の窪地楠が浴（河野晃氏所有）には古代の土器が多数出る所があり、斎藤定先生

が早くから着目して研究しておられる。

猪 熊

猪熊はむかしから猪熊街道と呼ばれる萩方面に通ずる街道であった。鉄道もこの処をトンネルによって開通し猪熊トンネルと言う。

猪熊銅山は多数の坑道の穴を残したままとなっているが、大正十年頃まで掘り出された鉱石は馬車に積まれて萩浜崎まで出され、船に積み替えられて門司港の（自念組であったか定かでない）方へ運搬されていた。その事務所が馬場の現伊藤忠一氏宅の所におかれていた。

その前旧藩時代には旧避病院の附近に「たたら場」と呼ばれる工場があったと古老の語るところである。その後石灰小屋が置かれ昭和初年頃まで、坂本の渡辺信亮氏が石灰を焼いていたと語っていられた。

当時はこの焼石灰が土用の炎天のひる中をねらって水田にまかれて、病虫害の駆除予防をなされたのである。その労苦の程は今の人には想像もむつかしいと思われる。

猪熊に大石義雄の供養塚と称するものがあると古老から聞いたので調査に行ったが、年号も何もない粗末な墓石がある。土

地の人は大切にしている。多分江戸時代からこの地に住んだ士族前記の新山氏、上山氏、福原氏、野原氏、小川氏などをはじめ土地の旧家の河野、久保田、宮内、藤原各氏が大石義雄の遺徳を景仰して供養崇敬したものと思われる。

相 崎

相崎城、一名を切山城と呼ばれる城山のある相崎は、山を越えれば直に本郷三明戸（三明戸城）に通じ、また羽賀山の間道によって福井側の吉田、莚野に通じて一大要害地をなしている。切山の麓の、弓細工、土居の地名は今も田地となって昔を探るよすがもないが相崎の集落の奥を尋ねるとむかしの武士屋敷の跡らしいところが続いている。

相崎の入口の古墓（よまか）はイボ地蔵と称せられて、その墓石を叩いて石の粉をイボにつけると治癒すると言ひ伝えられ今もなお参詣者が多く、盆にはこの処で盆おどりが行われるとのことである。古老の話では山中鹿之助の墓といわれるので調べてみると、赤ぼう岩の古い宝篋印塔の墓石があり時代としては尼子時代のものらしいが不明である。年号のあるものがあるのでよく見ると天保七年申年の洪水に流され死亡した人の墓である。この処と一緒に建てられ現在まで諸人が供養の眞ごころをあらわして

いられるものである。馬場の駐在所の辺、湊の入口の道路脇にある親子の墓（これも申年の水の犠牲者）と同様によく慰霊供養がなされていて美しい人情が表現されている。

本郷、羽賀、坂本

本郷

弘仁二年（八一）阿武伊の本郷に駅が設置せられた。兵部省式に、「長門阿武伊、今案ずるに阿武郷の内にあり、駅は俗に阿武井の本郷と言ひ、松原より十四五丁東の方にある也」とあるから、今の本郷の俗という地名の附近が昔の阿武伊の駅の跡であろうといわれている。阿武伊とか阿武井と書いてあるのは現在の大井のことである。

駅には所定の駅馬が置かれ（はじめ五匹であったがのちに三匹となった。）、附近の民家が駅家に指定され、そのの壮丁（一人前の男）が駅夫として奉仕することになっていた。

都から命令に従って往来する役人が駅に着くと、駅長は備付けの駅鈴という鈴を鳴らして駅馬を呼び、次の駅まで役人を送ったものである。次の駅とは埴田駅（小畑とも中津江とも言われる）一方は小川駅であるが、小川駅までの間にもう二駅あったともいわれている。

そもそも本郷とは「もとむら」ともいわれ、集落の開け発達した、もとの所という意味からでた地名であって、大井本郷は大むかし阿武の国の本郷で、のちに奈良時代になって郡家と称する役所が置かれたと言われる。山口県の地名の書籍を見ると、

玖珂郡本郷、豊浦郡本郷、美祢郡本郷、吉敷郡本郷などあげてあるが、まず近くの大津郡向津具本郷へ行ってみると、大井と同様に古代遺跡が所々方々に散在していて、さすがに地の靈を感ずる。大井のような盆地の周辺の山々に石棺古墳が見られ、王屋敷と称するあたりから、国宝に指定せられた細形銅剣が出土し、清宗と称する地名があり平氏の墓と称するものが多数並んでいる。有名な二尊院や日吉神社など京都文化に直接つながる前記の古墳や出土器があるなど、本郷はそのむかし向津国の本郷であったことがわかったのである。大井の本郷を説明するために向津具の本郷の話を書いたが、大井の全域が阿武國の本郷であったと言ってもよいと思われる。

大井出身の阿武公人足は、僧泰仙と称して奈良の大安寺に居り、工術をもって名高く、みごとな水時計を作って献上し、外従五位を授けられたのは阿武伊の本郷の駅が設置せられた同年の弘仁二年であることが書物に記されている。

駅の附近に善福寺があったが、時代はいつの頃か、明瞭でない。大応寺古記録の中に、この善福寺が指月に移り、のち又川島に移転したことが記してある。今は本郷の善福寺という地名となっている。

道のそばに大きな地藏尊の石像が建てられている。宝暦四年

(一七五四)三月二十四日に建立せられ、建立頭取、和讃施主として当時の関係者の名が刻名されているが、長嶺家が四家、山根家が三家、山本家が二家、落合家が二家、渡辺家が二家、その他各家の名がある。

吉見系図に弘安五年(一二八二)十月二十三日、吉見家五代頼行が、はじめて石見国吉賀郡に来て、蒙古の再び襲来に備えて西國防備のため大井浦の櫛山の要害を守ったのであるが、その時従って来た武士七騎、羽隅、長嶺、落合、波多野、日隈、野村、水津の名が記してある。別項でも述べたが今この地像尊に刻まれた名前とくらべて見ると、現在もなお当時の家筋が歴然としていて本郷の因縁の古さを偲ぶことができる。

大井の庄屋役を永らく勤め、のち毛利家に仕えて、萩藩閥閥録にも記載されている長嶺家について紹介する。

長嶺家略系という系図が伝えられる。本姓菅原姓としてある。

源左衛門尉 清和天皇二十四代の後胤吉見大蔵大夫正頼の家臣

天文二十年十月五日野戸路山益田陣切崩しの時戦

功あり正頼より感状を賜わる。

千四郎長次 浪人して大井村に居住す。

彦三郎長之 吉田に居住。のち大井村秋枝刑部左衛門(この秋

枝家は現在黒川に住む)の跡へ引越す。寛永十一

年五月二十九日死去。心涯道無と号す。

(津和野より竹を移し植えて本郷に竹林を仕立てて繁茂せしめたことが記してある)

庄兵衛 大井村庄屋役を勤む。

寛保二年(一七四二)二月二十四日地下上申に署名して提出する。

源介 明和二年(一七六五)六月三田尻開作につき功労あり、御恩米、御根帳取計らい、三十人通に仰せ付けられ、御厩育方、米銀御払方役を仰せ付けらる。

薙刀 国次作 槍 兼光作

脇差 肥前国忠吉作などを所蔵している。

墓は旧道羽賀登口の左側にある。

鹿足郡小川村(現津和野町元笹山)長嶺伊勢太家所蔵の古文

書には、天文九年(一五四〇)子十二月二十三日吉見正頼が書き残したと言われる「吉見記」並びに「天文年中改吉見侍帳」が所蔵され、これには五百九十八人の姓名が書き残してある。貴重な史料である。

三明戸は羽賀台の地下水が清水となって噴出するところで、むかしは水明戸と書かれていた。太古開闢以来この水は流れていらく、夏は氷のように冷たく、冬は湯のように暖かくそ

のため雪どけも早く、人類をはじめあらゆる動物植物もみなこの恩恵を受けている。天下無双の名水であるが、世間にあまり知られていない。太古この水を求めて人間が集まり集落がひらけて、この村の名を呼ぶに阿武井から大井の字が用いられ、その、もとのむらをも本郷の水明戸と呼んでいたことが考えられる。この附近に住む人々は莫大の恩恵に感謝して、泉の上に水神様を祀り報恩の赤心をあらわしている。

右の方に王子ヶ森と称する森があつて積石の塚があり石燈籠が建っている。これが別項に誌した南朝ゆかりの王子の墓といわれて、山本家がお祀りをしていられるものである。一説には馬の墓ともいわれ王子の乗用していた馬とも思われる。

この上の山を三明戸城または切山城と呼び、吉見正頼の弟、頼季の居城であつたと伝えられる。福井吉田の伊藤努氏に伝わる系図を見ると、大和守頼季は、永正十六年（一五一九）正月三日生まれ、天文十二年（一五四三）大井村本郷三明戸城に在城す。この時に氏を伊藤と改称す。元龜元年（一五七〇）卒す。年五十二才。法名陽涼院殿秋月大居士である。

この家は吉見家没落と共に隠退して福井吉田に住して農業を営み現在に至った旧家で、同所には同姓が多数あるが分流と見られる。

萩藩閩録の伊藤家を見ると、これと関係のあるものがあつて興味深いものがある。吉見家と大井本郷との深い関係を知ることが出来る。大井坂本の伊藤家の中に、これと一族の人があると見られ、また斎藤家は伊藤努家の因族である。

岡三重氏の裏山の宝篋印塔は大井郷の戦いの時戦死した岡神三郎益忠と頼之の墓と見られている。なおかくれキリシタンの墓と称せられるものが六基ある。うち二基に年号があり、元和と延宝である。いずれもあかぼう岩の雀堂と称するものである。

本郷大迫に山根吉郎右衛門と言う庄屋が居られて、福井の庄屋まで勤めた家柄であつたが、大正末年頃萩市中へ移転されたが、その家の古文書がはからずも、昭和五十九年四月八幡宮で鼠の食い破った額の裏張りから発見せられた。内容は左記の通りである。

「私は大井村において百姓を致し、代々目代役をつとめています。父市郎右衛門儀文政二年から天保二年まで目代役を十五年。後地組の畔頭役を兼帯として四ヶ年つとめました。

天保五年地下仕組みの資金として銀五百匁を差し出しました。その勤功に対して私の身柄一代名字を御免下さらばありがたく存じます。（中略） 庄屋 山根吉郎右衛門」

以上の如く埋もれた歴史が突然あらわれた好例であつて、後

地組の呼称が本郷までも使われていたことがわかるのである。

本郷公会堂の前のいなり山にも石棺古墳がみつかっている。

この山に稲成神社があつて舞殿では本郷地区でもチャンチキ舞を行っていたとのことであるが、今では鳥居なども倒されて昔の姿はなくなつてしまつた。

松翁山弘誓寺は、正保年中（一六四四）八幡宮の宮地に真言宗安養寺と称する社坊があつたが、無住で大破していたので領家の曹洞宗の大慈寺からおつとめに來ていた。明暦の頃（一六五五）洞春寺四代如天和尚の弟子機外祖活と申す僧が七重の生まれであるところから、洞春寺へ願つて安養寺を本郷に引寺して、弘誓寺と改め、如天を開山とし機外を中興としたと伝えられる。この時観音山も願出て弘誓寺の抱にした。

弘誓寺の本寺は京都の建仁寺で中本寺は山口常栄寺、萩洞春寺で格式の高いお寺であつた。仏像は本尊、圓浮檀金之阿彌陀仏（一尺五寸）、脇立、勢至觀音（一尺）、毘首羯磨之作、これは天平八年丙子年東大寺開眼供養の時、印度の僧、佛哲仙那が持つて來た尊像で、信濃の善光寺の三尊と同作と申伝えられている。

境内の滝の下方に縦一丈二尺三寸、横一丈四尺位の巨岩に文字彫上げの詩が大書してある。有名な和智東郊の作である。

日上林巒入画図 日は林巒に上つて画図に入る

疊成素練掛崎嶇 疊成す素練崎嶇に掛る

請看石上題詩処 請う見よ石上題詩の処

字々と流飛作珠 字々流とともに飛んで珠と作る

宝曆十三壬午閏孟夏 東郊

以上は風土注進案の記載である。

このお寺は明治初年、吉敷郡上宇野令萬年寺へ合併して寺号廃止となつたとのことである。

観音堂は村人の尊信と諸人の崇敬によつて護持され日々隆盛に赴いている。風土注進案には

観音堂 木像 一尺一寸五分 作者年号等不知

但し 堂九尺四面茅葺之事

右住古弘法大師松翁山岩窟に至り一刀三礼の聖觀音彫刻し此の山の滝の前に安置、岩窟の跡、奥の院と号し、今わづかに見ゆと記載してある。

七郷の一人、澤宜嘉卿が慶応元年五月十五日から三年八月まで弘誓寺に潜居していた。卿は生野義挙に破れて、文久二年十月二日四国に逃れ、翌元治元年六月下関に出て富海を経て生雲、宗頭、大島等に潜居を移し当地に來られたのであるが大井に在居中は村内有志の家をしばしば訪問せられて数々の色紙や短冊

に詩歌を残して居られる。

慶応三年十二月朝廷のおゆるしがあって、明治元年一月二十日に帰京され、参与職、九州鎮撫総督、外国事務総督参与、長崎県知事、外務卿、盛岡県知事、を歴任され同六年二月特命全権公使露国駐劄を命ぜられ赴任に先だち面疔にかかり九月二十七日に薨去せられた。三十九才であった。

本郷の山本誠作氏が卿に近侍しておられ卿の遺児（竹内通という女性との間に一男一女があった）を伴い再度京都に登られたりして卿のために尽された。

大正十五年澤卿の実孫宣一公が当地に来られ、弘誓寺にあった遺品を持ち帰られたとのことであるが、今もなお阿字雄家には卿の遺愛の硯箱、はかま、書画などが所蔵されているとのことである。

山本家に対しては澤家より明治天皇の御衣を贈られ、同家に宝蔵されている。

卿の従者高橋甲太郎は当地で逝去し弘誓寺に純忠源重健之墓と刻銘した墓碑がある。甲太郎は橋本將監しやうけんと変名していた。確堂と号して詩書にも達していて彼が書き残した『山陰靖難記』は、彼が京都から卿を慕うて三田尻に来て、直に生野の義挙に従い、戦い敗れて卿を守護して山陰、四国をかくれ逃れていた

間のことと詳細に書き残してあり、読むものをしてうたたた慷慨悲憤の境に引き入れるものである。

当地に来て慶応二年幕府の軍が長州に逼ったいわゆる長州征伐の時は長州軍に加わって力戦し、戦傷を受け、翌三年二月三日逝去した。彼の郷里兵庫県出石町教育委員会に頼んで遺族をさがしてみたが不明であった。彼の事蹟を書いた「出石郡人物誌」の一部を送附して来た。高橋甲太郎の純忠を貫いた生涯に合掌せずにはいられなかった。

なお吉田松陰先生の兄、杉梅太郎先生が浜崎代官見習から代官本役になられた当初の頃（慶応三年四月頃）、大井村弘誓寺、春川公（澤宣嘉卿のこと）御直所近くに付き、多人数相集り候儀は、いかにも御威光を憚り奉らぬことになってはと（有名な傑僧島地黙雷和尚の説教を同寺において行われたのであるが）、いろいろと気を使って書状を出しておられることが「学園杉先生伝」に記してある。

山根権平氏は明治五年七月大庄屋許（郡役所の前身）見習にて当分御普請御用掛を申付けられているが、のち大井村長をつとめられた。山根辨作氏は大正二年から昭和十六年まで二十八年間大井村長をつとめ多大の功績を残された。嗣子は山根寛作氏（中国電力KK社長）である。

羽 賀

羽賀は風土注進案（天保時代）の記録には小村、羽賀組

小名 布 田 家五軒

同 後藤代 家七軒

同 嶽 家六軒

とある。十八軒あったのがだんだんと減少して現在の如くになったのである。

昭和六十年六月、佐伯宇佐芳氏が小川分と称する田の巨岩を取り除く作業中にひすいの勾玉が出土して話題を呼んでいるが、現地に行ってみると、むかし水害のため付近の山が崩れ流された跡があり、巨岩が多数頭を出していて、田のすぐそばを水が流れて、湿地帯のような場所である。小川分とは大井在住の萩藩士で小川太郎二郎と称して、猪熊、羽賀、仁保谷を領有していたその人の領地のことである。

この処に古墳があろうとは全く意外のことで専門家も気付かなかったのであるが、まだ田の中の巨岩が二三基あるので、これも古墳ではないかと思われる。

付近に「かじや」と呼ぶ地名があって、むかしの「金くそ」が出土しているので、太古の「たたら跡」であるならば古墳と

の関係が考えられて頗る興味を呼んでいる。

羽賀は慶長元和の頃、落合右京、阿武掃部、福岡宮福等によって開かれたとむかしからの言い伝えがあり、そのように信じられていたが、勾玉が発見されて、古墳時代から栄えていた羽賀を見直し、また各地区、各集落に古墳を残した太古の大井全体の文化を考え直さなければならぬ。

古墳を残した豪族の富強の背後には強大な経済的基盤があった、富豪を支える物や人の力がなければならぬのであるが、古代の大井に、またその周辺にそれだけの力があつたのであるうか。米が多量に作られていたか、たたらと称する工場で鍍や剣などが多く作られていたか、漁業で多くの収入を得ていたか、或いは石器や土器を多く作っていたか、或いは海の外から物や人が移入されて富豪の生活を支えていたのであるうか、不可思議の問題であるが、専門家によって解明されることを期待して止まない。

日本書記で渡来人ののちを見ると、応仁天皇七年の九月に高麗人、百濟人、任那人、新羅人、が来朝して、池を作った。八年三月百濟の王子直支が来朝し、十四年二月の縫衣工女をはじめ、弓月君が百濟から百二十七県の人民を連れて帰化し、又その頃大学の阿直岐や王仁も帰化した。二十年九月阿知使王そ

の子都加使臣が十七県の人民を率いて帰化したことが記されている。この状態が天智天皇の時代まで続くのである。この間仏教仏像が伝わり、学問がひらかれ、建築、養蚕、機織、みつ峰まで伝来したのである。

この頃のことを想像すると、大井周辺には高松塚に描かれたような美しい文化人がつきつきと来朝して、新しい文物や技術をもたらして、稲作や、たたら工業の技術や、建築や、漁業の方法なども進歩して経済的基盤が出来、各集落の人々の上に富を集め、勢力を築いた豪族が多くあらわれて各集落、各地区毎に古墳が残されたのではあるまいか。そのうちに古墳文化の時代が過ぎ、仏教仏像の伝来によって、やがて大井の大寺が建立されて飛鳥時代の文化の花が咲き、「咲く花のにはうが如き」時代が大井にも訪れたことが想像されるのである。

さて羽賀の溜池から上方の竹林一帯の土地はもと落合家によって開かれ同家の所有であった。

落合家の屋敷は溜池のすぐ左上の平地であった。屋敷の上に古い墓石が三基建てられているが自然石の無銘であるが、これが羽賀の落合家の初代右京とその源左衛門等の墓と見られる。付近に地藏尊があるが、これは先祖の供養のためのちに建てられたものと思われる。その上方、三ヶ所に代々の墓や一族の墓

が約五十基程並んでいる。明治初年頃、萩市内に移住せられ、現在は萩市河添に住し、落合勇夫氏が当主である。

この家系を調べてみると、清和源氏、三河国渥美郡落合村に住し、源頼光の一族である。その地名を名乗って落合氏を称した。弘安五年（一二八二）十月二十三日蒙古再襲に備え西国守備のため能登国から津和野に下った吉見頼行に従って来たのが落合又次郎直春である。爾来三百十八年余り津和野に居住していた。

右京進忠安 天文二十年十月五日津和野野土路山益田陣切り崩しの時戦功あり、吉見正頼より感状を賜う。

永禄十二年十月十三日大内輝弘山口へ乱入の時、津和野より吉見勢五百余騎を引き連れ、防州宮野杖坂にて奮戦し討ち死にす。子源藏にあて吉見正頼の感状あり。

右京進忠房 若名源藏後に右京進忠房。吉見広頼隠居の方大井村に付き添い居候。

源兵衛秀安 忠房の弟、大野毛利就頼に従い熊毛郡大野に住す。

○羽賀落合家

右京進源藏 吉見広頼大井浦にて死去の後、大井羽賀に帰農し、源左衛門 子源左衛門と共に田畑を切り開き溜池を作る。

吉兵衛の父 延保四辰三月十四日没。

吉兵衛 正徳三己六月十三日没。

五郎衛門 享保十八丑三月十日没。

五左衛門 宝暦三酉十一月六日没。

五郎右衛門 宝暦四年（一七五四）大井本郷に地蔵尊を建立す。

安永七戌十一月二十六日没。

猪之助 萩市内に移住す。明治二十六年旧正月三日没。

◎三明戸落合家

半右衛門 羽賀落合五郎右衛門の叔父。分家す。

明和六丑正月十四日没

吉兵衛 半右衛門の子。本郷に地蔵尊を建立す。

文化二丑十一月二十一日没。

以上のように旧領地の大井羽賀に住すること二六〇年余りにして萩市内に移住されたが、大野毛利家（吉見広頼の娘吉川彦次郎と結婚し大野毛利と称する）に従い熊毛郡大野村（現平生町）に移住した落合源兵衛秀安家は、大野村村長落合真一氏が出て現代の社会に貢献され、大いに祖先の余光が表れたのである。

兄は旧主の隠居広頼に従って大井に帰農し、弟は新生毛利就頼に従い新領大野村に住したのであるが、約三百八十年後の今、

両家が互いに家に伝わる史料を交換しながら親交を深めておられる姿を見ると歴史の尊さがわかり、祖先の遺徳を感ぜずにはいられない。

大野落合家当主落合浩氏の父は徳山藩士でその祖先は益田市増野家の出身で、大井保寿寺（大応寺）住職梵良彦明（大内政弘の庶子）の子で医を業とする家である。因縁の不思議に驚くものである。

福岡家は萩浜崎泉福寺福岡氏と同流で先祖は、山中鹿之助を備中あいの渡りの川中で組打ちの上、首を取った豪傑福岡彦左衛門元明である。別項豊臣時代の大井で申し述べたが、慶長移封の後、兄は泉福寺を興し、弟は大井羽賀に帰農したものである。泉福寺系図に弟宮徳と記してあったが、福岡家では宮福となっている。明光寺過去帳を見ても宮福である。先代福岡重信氏は大正十年にシベリア出兵の時にも出征され、筆者は小学生時代に慰問文を出した処、戦地から返信を下された温情の勇士で、のちに助役として村政に尽くされ終戦の時にもよく対処された民主的な人格に対し、感謝に堪えない。沈着剛直にして温情豊かな傑物でよく先祖の風格を伝えられた人である。

阿武掃部家は吉見家の旧臣で（風土注進案に記載）蓮野村に帰農した阿武助兵衛尉の同流と見られる。父を安軍人と称し吉

見正頼の臣であった。吉見廣行より二十石七斗七升の地を与え
るとの判物を有していたが吉見家没落後筵野の農家（阿武武左
衛門家・長門市深川阿武新吉家）となったものである。羽賀の
阿武家も早くから羽賀の開拓に従事されて、堀、嶽、隠居、新
宅、とわかれたものであろう。

阿武嘉右衛門は畔頭をつとめられ、阿武文吉氏は阿武郡郡会
議員をつとめ、嗣子権三氏は永く村役場農業技師、のち農協長
など大井のために尽くされた。

佐伯三郎右衛門は古い時代に畔頭役をつとめ、また本郷地蔵
尊建立の頭取施主として名を残された。

隠居阿武家の前に建てられた宝篋印塔には左記のような刻名
がある。

表面に「椿巖妙寿大姉」裏面「永正二年（一五〇五）乙丑十
月三日者大斂〇之辰縁於今日十八日書孝子等」（一字不明。大斂
とは棺をおさめること）とあり、大内家の奥方か三明戸城主の
夫人の墓であろうと言われているが、不明である。これを明ら
かにすることは今後の課題の一つである。

羽賀の中央の左にそびえる山上に祀られているのは琴比羅神
社である。もともと金毘羅大権現といわれた神仏混合の宮であっ
たが、明治初年すべて神社に統一せられたものである。祇園社

が八坂神社と改称せられたのもこの時のことである。権現信仰
は山嶽宗教ともいわれて古い時代から祀られたのであるが、記
録がないらしい。農業、林業、漁業の神で必ず海の見える所に
祀られてあるとのことである。

天保閱兵の地として有名な羽賀台は集落のすぐ上である。大
きな記念碑が建てられている付近には福川青年会によって桜が
五百本植えられ、名所となっている。

大正初年頃、大井、奈古、紫福、福井、四ヶ村連合運動会な
どが行われた広野は、現在三十町歩の水田となって、筵野農業
組合によって大型農業が行われて、さすが先見の明のある人物
が一人あれば荒野も忽ち良田となることが、はっきりと判るの
である。これは大井のことではないが、すぐ続いた付近のこと
であるのでひとこと申し述べた次第である。

坂 本

坂本とは羽賀へ登る口にあたり坂のもとであるため坂本とい
うのであると古書に見える。

大井川の流れがむかし坂本の山すそを流れていたことが、大
寺の発掘調査によって明らかになったとのことであるが、大応
寺古文書に左記の記録がある。

当村本川筋と題して「但し川上は御本手領よりだんだん流れ坂本の後ろへ通り、坂本の尻、広瀬より御本手領境を通り、湊まで川筋長さ一里余り幅広き所坂本の上より広瀬までの間は両方の土手うち四拾間、もつとも平常の水通りの間は十三四間程有之、その余りは川原にて御座候事」とある。寛保二年（一七四二）戊の二月十五日、庄屋伊藤権兵衛より、井上武兵衛に宛てたものである。

むかしからの言い伝えに、坂本は萩の殿様の姫君が御興いれの時御化粧料として坂本を徳山へ持参されたものであると言われたのであるが、学者の先生方は記録がないと申しいられる。

ところが徳山家中分限帳（奈古の土、案野家所蔵）を見ると、冒頭に

一金参拾両 訓姫様 文政二年、松野熊之丞様に御縁組の節、毎年春秋両度金壹拾五両宛一ヶ年参拾両、江戸宛差し送り来り候（中略）

依って当丁未歳より御生涯中、進められ候事

との意味のことが書いてある。このことを姫君の御化粧料と言ひ伝えたものと思われる。

坂本の古寺は保寿寺の跡とも考えられる古い墓石が竹やぶの中に残っているが、保寿寺時代のものと、のちの大応寺時代の

ものと住職の墓がある。

永通り伊藤家の墓には

文明十年	大永三年	天文元年
永保六年	慶長三年	寛永六年
元和八年	正保二年	承応四年
寛文八年	延宝二年	

の年号が刻銘されていて、家の古さがわかるが同家は津和野から移って来たもので三戸城主と関係のあることを先代の伊藤胤一氏が語っておられた。

大井の庄屋を代々にわたって勤めた大河内伊藤家の墓は、賀田家の裏山にある。麓の地藏尊の脇に巨大な五重の石塔が建っている。よく見ると願主伊藤小野右衛門と地藏尊に刻名されている。

伊藤小野右衛門、伊藤権兵衛、伊藤三郎衛門、伊藤文吉、などみな庄屋を勤めていられる。大河内伊藤家は大内系図をはじめ大井関係の古文書多数を伝えている。

新宅伊藤氏が旧藩時代萩の御蔵本の修理に栗の木の用材を大井湊から船で送り献納されたことが奈古勘場日記に記してある。

この地の山根家、大田家、斉藤家などみな畔頭をつとめた有力者で、安政大地震の時は庄屋畔頭が中心となって献金をして

徳山藩の財政を助けている。

斉藤市熊氏の父悌一氏は弘化三年（一八四六）奈古の医家里川家に生まれ、大井の畔頭斉藤孫右衛門の養子となり、明治十五年開業試験に合格し、自宅で開業した。大正五年病を得て廃業した。

ついでに阿武郡医師会史によって大井の医業のことを略述すると、文久年間頃大井後地周鷹寺下に熊谷尚謙、大岡徳斉、と二軒の医者があった。熊谷尚謙のあと、光謙の三男の能美貞造が、萩江向水車筋の医能美遠翁の養子となって、明治二十四年三月十日庄屋に移り開業した。同三十七年六月一日さらに越ヶ浜浦へ移った。大井で開業中自村のほか田万崎村の村医をつとめたこともある。

松永栄三郎、小林嘉源太が明治三十四五年頃から明治末まで開業していた。

林進一、柳井正一が明治末年から大正七年頃まで開業していた。

磯川亀七氏は生雲村相上の生まれで二十四歳の時医学に志し、三十歳で試験に合格し、はじめ広島県深安郡大津野村で開業していたが、大正二年九月大井庄屋に移り開業され、昭和三十年まで村民の面倒を見て下さった真深な人格と、文学と信仰の深

い慈悲と温情に今なお多数の人がその徳を慕っている。

河野武熊先生は鹿兒島生まれで明治三十八年四月慈恵病院医専卒業後、大正二年から萩玉木病院で外科を担当、同八年八月門前で開業され、親、子、孫三代にわたり大井地区をはじめ付近の各地からその徳を慕って来る人は多数である。

通正先生が早く世を去られて、人々は一時悲痛の底に沈んでいたが、現在では後嗣の通裕先生が活躍されて人々は安堵している。

河野武熊先生の深い仁徳、通正先生の温容堂々とした暖かい人柄など、大井の人々は医療の点でも極めて恵まれていたことがわかるのである。

室屋平井家は大内家の重臣で山口の平井村に住していたが、大内家没落ののち大井に住したと伝えられ、平井半次郎翁は本郷の山本吉郎先生と共に郷土史家として知られた人である。

平井氏の出身地といわれる山口市平井村を風土注進案によって調べてみると

平井入道屋舗跡今はその所在不明であるが大内義弘の重臣に平井備前入道道助という者があり、義弘泉州堺で戦死の時、弟弘茂を擁護して周防長門の守護職を確保させる功があった。道助はこの地を領有して地名を名乗ったものである。

と記してある。また左記のような記録がある。

真宗龍頭山円龍寺の寺伝に当寺開山の俗姓は大内持盛の息女春子である。はじめ平井次郎判官貞盛のもとに嫁いたが貞盛が豊後国で戦死したため室家春子世の無常を感じ且つ守本尊の毘沙門天のお告げによって京都に上って蓮如上人の弟子となり明星尼となった。とあるが、室家の言葉が使っている。はじめは夫人のことを室家と呼んだが、のちにこれを憚って室屋と呼ぶようになったものらしい。古い由緒のある家である。

徳山領大井村由緒石高附（大応寺蔵）を見ると、

一、観音堂 坂本南の山根にあり、大応寺の抱である。

一、弘法堂 右同所東の方にあり、同断

一、大歳森 坂本南の山根にあり、往古より大歳森と言う、

地下聞伝へ御座無く候事

一、猿王神森 坂本にあり、但往古より猿王子と言い、神体石

像一体あり、此の処小名を万代平という。地下

聞伝へ由来御座無く候事

以上のような記録があり里人の信仰をあつめていたものである。

井手は大井手とも大堰とも書く、大むかし水田耕作がはじまり、はじめて稲が作られる頃、川をせきとめて井手が作られた。

堰とも言う。農業者の最も大切なもので、もとは最高の権力者がこれを作り支配していたが、のちに村の総代の庄屋が支配するようになった。井手付近の土地を所有し支配したのは坂本の伊藤家でなかったかと思われる。その前は大寺であったのではあるまいか。

大井の地名の起こりは昔琳聖太子の子孫が王として住居せられたので王居と称したと伝えるが、今の学者は大井手が大井の起こりではないかと言っている。

大井川と徳山領のこと

大井川と徳山領のこと

最後に大井川と徳山領のことについて少し申し述べる。

大むかしから水源地を支配するものは村を支配すると言う。

これはいずれの郷村でも同じことで、その土地を支配する者は必ず水源を支配して生活の用水や、稲作の用水を確保したのである。而して物資の運搬には川を利用した。

少年の頃大井川に竹材、木材を運び出す筏をよく見たものであるが、成長する頃になるとだんだん見られなくなった。その頃あじめ（阿字女）に県道が出来て紫福方面から馬車が来るようになり、川は余り使われなくなった。

つまり大正初年頃まで仁保谷に川舟が通っていたのである。

川舟を通すために川浚えが行われ、上井手と下井手の中央を開いて舟を通すように工事が萬延元年（一八六〇）九月十日頃になされた記録が奈古代官所日記にある。

向領（徳山領から萩領を呼ぶことば）庄屋黒川森田忠助から仁保谷まで舟を通すための工事につき地下役人の立会を求めたので徳山領大井庄屋伊藤民次郎以下畔頭が罷出た処、庄屋森田忠助がつどのため代理として、大井門前住人重仁右衛門が畔頭、石工などを連れてきたが、上井手、下井手共どこへ通

道をあけるかについて意見が違うので、もう一度考え直すため、双方引き取ることにした。もっとも井手の上手の方の石を取り除く工事は昨日から取り掛かっていると伊藤民次郎から申し出があった。

右の工事のため石工が大島郡、広島から三十人ばかり来ているので、仁保谷に宿泊させてはあまり遠方なので不便につき宿泊所を心配して貰いたいと森田忠助から願出があったが、多数のため問題が起こることもはかり難きにつき、その機はおこるとわり致す。

その後重仁右衛門が来て双方相談の結果、上下両井手共およそ中程の処を舟通りにあけることが決定して、普請をはじめたと記してある。

その後、文久年間（一八六二年頃）萩領の田が旱天のため、危機にせまっているので徳山領の井手の水を分けてもらいたいと森田忠助から、伊藤民次郎へ願出が来ている。

明治四年廃藩までこのような状態が続いていたのである。

また海の方でも徳山領大井湊と萩領浦の間で境界について紛争が繰り返されて、遂に文久三年五月十三日川口で暴力行為が起きて、双方負傷者が出たことは別項湊の項で述べた。

そこで徳山領由来のことについて少し述べることとする。

毛利輝元の奥方清光院夫人には子供がなかったが、愛妾の二の丸様（児玉三郎右衛門元良の娘）には三人の子供があり、長男秀就、二男就隆で末が姫であった。

就隆が元和三年（一六一七年）都濃郡南部諸村三万石を貰って分家したのである。同七年（一六二一）南部十一ヶ村と大井と奈古を交換して、大井川を境として、萩領と徳山領とに別れたのである。（但し坂本と三明戸の一部二軒は徳山領）

寛永十一年（一六三四）幕府の公認によって徳山藩となった。知行高は寛永検地で四万十石であったが、廃藩の頃は内検高六万九千石であった。

第三代元次の時、徳山領の百姓が田の畦付近の松の木を伐ったことから萩藩の足輕に切り殺され、本藩との不和を生じ、遂に徳山藩は享保元年（一七一六）幕府に取りつぶされたのである。それがため徳山領の藩士も百姓も遺児亀次郎様にあとつぎをさせ、再興を願出て、幕府に直訴を計ったり、百姓たちは萩本藩に嘆願のため押し掛けて明木で差し止められたり劇的な大騒ぎとなった。

享保四年（一七一九）再興が許されたが、この間帰農した家も多くあった。徳山領の百姓たちはいろいろ物心両面の苦勞の程が推察される。明治四年（一八七一）六月廃藩に先だって山

口藩に合併したのである。

徳山藩では年貢米の枧が萩藩より大きく、萩藩では一斗九合六勺入りの枧であったが、徳山領は一斗一升二合五勺の枧であったので一俵に四杯入れれば相当のひらきが出るが、よく辛抱して黙々として働いた先祖を偲ぶことができる。

いろいろ習慣のちがいができていたが、特に田の畦を塗るのに、徳山領では三鍬の内、一鍬は下の田から土を取ってあぜを作るとか古老から聞いていたが、これも処の状況によって畦道までも田に取り入れることもあり、諺に「あぜをゆくも田をゆくも同じ事」という言葉も出来たと古老の語るところである。

湊の米蔵へ入れられた米は、湊から船積みされて徳山へ送られた。村の若者は交代で番に出ていた。上の馬場の中原治三郎翁が若い頃、庫番に出た夜、米二俵がなくなり、厳しい取り調べがあったが、平素の行いが良いというので無罪となったと御本人から聞いた話である。断髪をはじめて実行したのはこの人と森重吉左衛門翁であったと言う。

上井手の近くの対岸の山に洞窟があつて、太古の人の生活したらしい跡があると古老の言い伝えがあるので、関係者が現地調査に行ったが見つかることが出来なかった。いずれ近く発見出来て大井の大むかしのことが更に明らかに判明すると思われる

る。

この辺で一応終わりたいと思います。いろいろと教えていただいたり、貴重な史料を見せていただいたお方に深く御礼を申しあげてむすびと致します。

以上

昭和六十一年一月二日

離れの二階にて昼のサイレンを聞きつつこの稿を終わる。

萩市大井馬場

堀 勇 (七十四歳)

参考文献

- 大井郷土史 伊藤作太郎著
- 日本史辞典 玉川治三、杉浦武共著
- 大内氏史研究 御園生翁甫著
- 津和野町史
- 益田町史
- 萩市史
- 萩藩閥閥録
- 民俗辞典 柳田国男著
- 防長風土注進案
- 人物往来 人物往来社

わたしの選んだ大井十景

わたしの選んだ大井十景

河野泰光

古への弘誓の声をそのままに
今に伝へむ阿字雄の滝は

ほりおこす宮の馬場にはいにしへの

弥生の人ぞ住む跡を見る

大井川末別れたる松の原

歴史を語る残り松影

今はなき出城の跡を偲びつつ

串山映えて出船入船

石窟に八百比丘も観音と

なりて語らむ古里の春

時ふりて昔を偲ぶよすがにも

面影残す阿武の松原

齋藤シン

ゆきて見よ泣くなはぐれの浜千鳥
よろづむれ恋ふ阿武の松原

金子みすづを偲びて

わかくして逝きしみすづの心満ち

奇しき音色ぞ永遠にひひかむ

いにしへを語るか阿字雄の滝の音

心の闇は砕きしとなん

山並に映ゆる七重の日暮どき

菊香恋しと松虫の声

朝まだき夢やぶるかやかへり船

みなと浜辺のすがた浮びぬ

初春に出船を祝ふ浦浜は

めでたき御世のしるしなりけり

森重初子

見はるかすお伊勢山なみ阿古の海
佐々古に佇てば一眸に入る

朝凧に佐々古が海の藻草わけ

神供の潮汲むぞ清しき

君知るや佐々古が浜の比丘尼岩

奇しき伝説次に記さん

岩崎千里

野々の丘から日本海を望む

忘れぬ山陰の丘の夕映えは

すすきの原をとざし暮れゆく

佐々古の浜の朝

浜千鳥細き足にて麻の葉の

足あとのこしつがひ去りゆく

澳新波止場の春

春告げる海猫の声きこえけり

入江につづく水面かすみて

野々の海を見おろす

いも畑つづける果は海となり

小舟の影に秋はひそけし

次々と堀り返されゆく石棺は

いにしへ人の栄えし里よ

あかね色極まれる空うすれゆき

出船にぎあう港浜辺は

寄せくる波松風の音万葉の

ふるきを偲ぶ阿武の松原

海原はみどりに晴れてはまゆうの

花白うして風にゆれおり

今はむかし石壁の窓よりひびきくる

銃声のすさまじき思ふ夏草に

年老いし人今も語れる日本海戦の

すさまじき音声ふるわせて

鶴山のみかん園の風物

その白き花の香りは山に満ち

みかん園の初夏は今極まれり

まろやかな鶯の声にききほれて

山路の石にしばしいこへる

山鳩のさびしき声はこだまして

みかん摘む手の節くれて見ゆ

久保田 牧 人

防風の花咲く浜の朝なぎに

網引く声は既に夏かも

合歡の葉の眠る宵きて浦人は

いさり火たきに沖へ出で航く

水 津 早 代

名にしおう阿武の松原浜つづき

松のこずえにみどり色ます

いにしへゆ伝へられつる穴観音

あかりのもとに人絶えまなし

紅葉は錦おりなすあじめ山

夕映にもえて秋深まりぬ

石段を登りてみれば景観の

阿字雄の観音壯嚴に満つ

故郷を遠くはなれて見し夢の

君と逢ひしは阿武の松原

月皓に海は映えゆる夜明け前
船出見おくる湊にぎわし

中村 ミヨ子

ホーム園ぬければ松籟さわさわと
春の日和む阿武の松原

あきないを降りて見れば新緑の
清き眺めの羽賀台そびゆ

阿武の君政めしといふ花の道
史実もとめて大井の里ゆく

海の香を若布スタレ満たしつづ
我が里の浜活気みなぎる

笹子浜喜々とたわむる幼子の

大納言良教詠みし、あふの松原、
過ぎ行く歌に歩みとどめむ

弘誓寺跡史実訪ねて大巖壁

小さな足あと砂地にのこる

漁火のともりてゆるる鳥賊釣り舟

流るる滝よ藤花盛り

笹子浜磯の香りの漂へば

数へておりぬ素直になりて

伊藤 美代子

渚にあそぶ時を忘れて

水と陽ときらめきゆるる大井川

飛鳥の世を思へどむなし今もなほ

春がすみらんまんと咲くやまざくら

鮎の遊びを川面に追へば

川底深くねむる大寺

七重の山路しばしたたずむ

濃き緑葉の間に白の五弁持つ

大寺の伽藍を呑みし大井川

はるかなる日本海を見おろしつ

夏柑の花匂へる夕べ

流れのうちに光かがよふ

青木いなり世に出でましぬ

しづかなる夜半と思ひて窓あけぬ

松浦 ヤスコ

夏柑の花香りてやさし

高倉のお社の空夏たけて

しろがねの雲清々と湧く

うに漁の解禁なりて浦人の
男の力海に競ふも

神垣はいや神さびてももしきの
池にかかれる橋のおもかけ

幾千年古墳まが玉羽賀の里の
むかしを偲び大海原を見おろす

高倉の荒神の社春なれば

千早振る神のみいづは高倉の

橋の香りを乗せて夕映えの

花咲かせたりうすべにの桜

山より見ゆる見島六つ島

雲は流れる七重路の丘

夏祭りの昔を今にお涼みの

星月夜三段土俵のかがり火の

あやしき千々に織りなす阿字あ雌山お

高倉神輿に水をまいらす

神輿に見入りし少年の日よ

流れにうつる紅葉のかけ

国道は海添にして入る大井

追ひかけられ又追ひかけしあばれみこしの

真清水のつきぬ流れは神代より

地形ゆたかに緑はぐくむ

少年の思出なぜか悲しき

水明戸としぞ呼びなせしかも

堀

勇

白波を蹴たてて急ぐいさり船

真鏡まがたがの清き心は水明戸みずあきどの

天照らす日尾のみやまのみ社に

今日のえものはえびす大黒

水ですすぎし心なりけり

みいづ輝く大井八幡

よしあしの茂れる中を大井川

天の戸を明けて知らるる光なり

すめる心は永遠に変らじ

水の戸あけて流るみやけど

朝日さし夕日かがやく阿武の里の

還り来ぬ友を慕ひて浜に佇てば

立ちのぼる清水のもやにつつまれて

飛鳥の大寺の発掘を見る

千鳥来て泣く阿武の松原

ほのぼのあけるみやけどの春

滝の音は高し阿字雄の観世音
めぐみも深し谷川の水

早わらびのもえいづる里みやけどの
王子の森にうぐひすの声

今日も又滝のひびきに誘はれて
観音堂のみあかしを拝む

天降る神のあとなり影向石は
八幡屋敷にそびえ立ちおり

大漁の音いさましく大井湊の
空にひびきて今帰りたり

<p>萩市 郷土を愛する心 大井 歴史を愛する心</p>	<p>昭和六十二年九月一日発行 著者 萩市大井一六一三 堀 勇 発行者 電話 萩⑧〇〇二五</p>	<p>印刷 桜プリント企業組合</p>
----------------------------------	---	---------------------

TRC102095

萩市立図書館



111326781